

Condensed mathematics ワークショップ

[Sch19, Section 2.A Appendix] の解説

岩井雅崇 (大阪大学)

2025 年 2 月 18 日, ver 1.00

Contents

0	はじめに	3
0.1	このノートの概要	3
0.2	参考にした文献	3
1	[Sch19, Proposition 2.9] の準備	4
1.1	基数	4
1.1.1	順序数・基数の定義	4
1.1.2	正則基数	5
1.1.3	強極限基数	6
1.2	圏論	7
1.2.1	普遍射と極限	7
1.2.2	λ -フィルター余極限と λ -極限の交換	8
1.2.3	コンマ圏	10
1.2.4	左 Kan 拡張	11
1.2.5	表現関手と余極限	13
1.3	レクチャーノート 1 章 2 章の内容で今回の発表で使うもの.	14
2	[Sch19, Proposition 2.9] の解説	15
2.1	[Sch19, Proposition 2.9] の主張	15
2.2	[Sch19, Proposition 2.9] の主張 (=命題 28) の証明	16
3	強極限基数によらない Condensed set の定義と性質. [Sch19, Definition 2.11] の解説	21
4	Condensed Set にならない $\underline{X} = \text{hom}_{\text{ED}}(\cdot, X)$ の例. [Sch19, Warning 2.14] の解説.	25
5	Cond と位相空間との対応. [Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16] の解説.	27
5.1	$T(*)_{\text{top}}$ の定義	27
5.2	用語 (qc, qs, T_1 , WH) の解説	28
5.2.1	qc, qs, T_1	28
5.2.2	コンパクト生成空間 (CG), 弱ハウスドルフ (WH), CGWH	29

5.3	[Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16] の主張	29
5.4	[Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16](=定理 50) の証明で用いる事柄	30
5.4.1	Cond の monic 射, epi 射	30
5.4.2	Cond の直積	31
5.4.3	qc	33
5.4.4	qs	36
5.4.5	コンパクトハウスドルフ空間	36
5.4.6	弱ハウスドルフ空間 (WH)	37
5.5	[Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16](=定理 50) (1) と (2) の証明	37
5.6	[Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16](=定理 50)(3) の証明	41
5.7	[Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16](=定理 50)(4) と (5) の証明	43
A	発表で言及できなかった内容のまとめ	46
A.1	整列集合	46
A.2	位相空間 CGWH について	46
A.2.1	CGWH の例	46
A.2.2	CG の性質	47
A.2.3	62 の証明	49
A.2.4	h 化	51
A.2.5	圏 CG と CGWH の性質	52
A.3	圏論関係	53
A.3.1	米田の補題	53
A.3.2	極限	54
A.3.3	フィルター圏・共終	55
A.3.4	随伴	56
A.3.5	圏同値	58
A.3.6	Kan 拡張	59

0 はじめに

0.1 このノートの概要

このノートは2025年2月17日-21日開催の”Condensed mathematics ワークショップ”での [Sch19, Section 2.A Appendix] の岩井の原稿である. ところどころ雑なところや脱字など非常の多くあるが, 発表に追い込まれている状況で書いたものなのでご了承いただきたい.

この原稿は勉強用のメモ書きを簡略化したものです. 勉強用のメモ書きについては https://masataka123.github.io/blog3/pdf/2025_02_18_Condensed_Mathmatics_seminarnote.pdf にあります. (QR コードは下) こちらは勉強用に書いたもので100ページくらいあります.¹



0.2 参考にした文献

この勉強会はシオルツのレクチャーノート”Lectures on Condensed Mathematics” [Sch19] を元に行われた. [SchClau] に YouTube の講演やノートがある.

当初はこれで勉強しようと思ったが, あまりにも難しい (+何を言っているのかわからない) ので以下の文献を大いに参考にした.

1. [Bar22] Michael Barz *Condensed Mathematics*
<https://www.dropbox.com/s/cl/fi/xm2bs6jgtv9oaqir2slbt/condensed-final.pdf?rlkey=r1x82m3a135rfeec86jrjj79k&e=1&dl=0>
学生の方が書いたとは思えないくらいきちんと書かれている.
2. [Stum] Bernard Le Stum *An introduction to condensed mathematics* https://perso.univ-rennes1.fr/bernard.le-stum/bernard.le-stum/Enseignement_files/CondensedBook.pdf
3. [Land] Marks Land *CONDENSED MATHEMATICS* <https://www.markus-land.de/teaching/>

上の3冊はかなり親切丁寧に書かれていて読みやすかった印象である. 特に [Stum] や [Bar22] は大いに参考にした. 他にも [Asg] や [Lep] などの修論・博論も参考にした.

圏論の基礎に関しては次の文献を参考にした.

1. [マックレーン] S. マックレーン 圏論の基礎 丸善出版
2. [alg] alg-d 全ての概念は Kan 拡張である https://alg-d.com/math/kan_extension/
Amazon で本が売っている.

¹こちらのメモ書きは(いずれ時間があれば)榎園さん・橋詰さん・松澤さんの発表しているところなども付け足していきたい.

個人的にはトポスを先に勉強しておけばよかったと後悔している。([Stum] や [Bar22] はトポスの一般論も網羅している印象である。)

基数などに関しては以下を参考にした。

1. [田中] 田中尚夫 公理的集合論 培風館
2. [Sha2] Shane Kelly *Fast track guide to cardinals for use with Lurie's Higher Topos Theory*
<https://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~kelly/pdfs/cardinalsFastTrack.pdf>

1 [Sch19, Proposition 2.9] の準備

1.1 基数

以下は [田中] に基づく。

1.1.1 順序数・基数の定義

定義 1. [田中, 3.3 節]

- 集合 A が推移的であるとは $x \in A$ かつ $y \in x$ ならば $y \in A$ を満たすこと
- 集合 A が全順序とは任意の $x, y \in A$ について $x \in y$ か $x = y$ か $y \in x$ が成り立つこと
- 集合 A が順序数とは A が推移的かつ全順序なること。

例 2. 以下は順序数である。

- $0 = \emptyset$
- $1 = 0 \cup \{0\} = \{0\} = \{\emptyset\}$
- $2 = 1 \cup \{1\} = \{0, 1\} = \{\emptyset, \{\emptyset\}\}$

定理 3. [田中, 定理 3.3.7] α, β 順序数について $\alpha \subset \beta$ または $\beta \subset \alpha$

Proof. 背理法による。もし定理が成り立たないのであれば α, β は \in での整列集合なので

- $x_0 \in \beta \setminus \alpha$ なる \in での最小元
- $y_0 \in \alpha \setminus \beta$ なる \in での最小元

が存在する。 $x_0 = \alpha \cap \beta$ を示れば、 $x_0 = y_0$ となり矛盾が示せる。

$t \in \alpha \cap \beta$ について $t \in \beta$ かつ $x_0 \in \beta$ なので、全順序性から $t \in x_0, t = x_0, x_0 \in t$ のどれかが成り立つ。 $t = x_0$ ならば $x_0 \in \alpha$ となり矛盾。 $x_0 \in t$ ならば推移性より $x_0 \in \alpha$ となりこれも矛盾。よって $t \in x_0$ となる。 $\alpha \cap \beta \subset x_0$

逆に $t \in x_0$ について x_0 は最小なので $t \notin \beta \setminus \alpha$ 一方 $x_0 \in \beta$ より推移性から $t \in \beta$ 。よって $t \in \alpha$ となり $x_0 \subset \alpha \cap \beta$ 。 \square

よって二つの順序数 α, β について $\alpha \leq \beta$ を $\alpha \subset \beta$ で定義すると順序数のなすクラスにも整列順序の構造が入る。

定理 4 (整列可能定理). (選択公理を認めれば) 任意の集合は整列可能である. よって任意の集合は整列可能な順序構造をもち, それはある順序数と同型となる

集合 A, B について $A \sim B$ を A から B への全単射が存在することで定義する. $A \sim B$ を A と B は同等という.

定義 5. [田中, 4.1 節][濃度・基数]

- 集合 A についてその濃度を, A と同等な順序数のうち最小のものとする. つまり順序数 α で $A \sim \alpha$ となるものの最小なものである
- 集合 A の濃度を $|A|$ として定義する. 定義から「 $|A| \sim A$ 」かつ「任意の順序数 β で $\beta \sim A$ ならば $\beta \geq |A|$ である.」
- 集合の濃度を基数という. つまり順序数 α が基数であるとは, $\alpha = |A|$ となる集合が存在することとする. 基数全体のクラスを Card と表す.

1.1.2 正則基数

定義 6. [田中, 定義 4.5.1] 全順序集合 $(A, <)$ とする. $B \subset A$ が共終部分集合であるとは任意の $a \in A$ についてある $b \in B$ が存在して $a \leq b$ が成り立つこと.
順序数 (基数) α, β について β が α と共終とは $A \subset \alpha$ なる共終部分集合で順序同型 $(A, \in) \cong (\beta, \in)$ があること.

定義 7. [田中, 定義 4.5.2]

- 順序数 α と共終な最小の順序数を共終数といい $cf(\alpha)$ と表す. $cf(\alpha)$ は基数となる.
- $cf(\alpha) = \alpha$ なる順序数を正則基数という.

定義から $cf(\alpha) \leq \alpha$ である.

注意 8. 定義から「任意の順序数 β について, $A \subset \alpha$ なる共終部分集合で $\beta \cong A$ ならば $cf(\alpha) \leq \beta$ 」である.

実はもっと強く「 $A \subset \alpha$ なる共終部分集合ならば $cf(\alpha) \leq |A|$ である.」なぜならば (A, \in) は整列集合であるので, $(\beta, \in) \cong (A, \in)$ となる順序数 (β, \in) が存在する. よって $cf(\alpha) \leq \beta$ である. これより $cf(\alpha) \rightarrow A$ という単射が作れるので, $|cf(\alpha)| \leq |A|$. $cf(\alpha)$ は基数なので $cf(\alpha) = |cf(\alpha)| \leq |A|$

命題 9. α が正則ならば, $|I| < \alpha, |S_i| < \alpha$ について $S = \cup_{i \in I} S_i$ について $|S| < \alpha$

Proof. $\mu := \sup |S_i|$ とする. $\mu < \alpha$ である. (もし $\mu \geq \alpha$ ならば $I \rightarrow \alpha$ で共終となるような写像が作れてしまうから) よって

$$|S| = |\cup_{i \in I} S_i| \leq |I| \cdot \mu = \max\{|I|, \mu\} < \alpha$$

となり言えた. □

補題 10. [Sta, 000E 3.7 Cofinality] κ を無限基数とする.

1. $\kappa < cf(\alpha)$ となる基数 α が存在する.
2. $\kappa < cf(\alpha)$ となる強極限基数が存在する.

Proof. (1). α を $|\alpha| > \kappa$ となる順序数の中で一番小さいものとする. α は極限数である. もしそうでなければ $\alpha = \beta + 1$ かつ $|\alpha| = |\beta|$ となって最小性に矛盾するため.

$cf(\alpha) \leq \kappa$ であるとする. この時 $S \subset \alpha$ で共終なもので $|S| \leq \kappa$ となるものが存在する. ここで $\beta \in S \subset \alpha$ について $\beta < \alpha$ より最小性から $|\beta| \leq \kappa$ よって S の共終性から

$$|\alpha| = |\cup_{\beta \in S} \beta| \leq |S| |\beta| \leq \kappa \kappa = \kappa$$

となるが, これは α の取り方に矛盾する.

また α は基数となる. なぜなら $\alpha \geq |\alpha| = ||\alpha||$ であるので α の最小性より $\alpha = |\alpha|$ となる.

(2) $\kappa < cf(\beta)$ なる基数 β をとり $\alpha = \beth_\beta$ をとる. $cf(\beta) \leq cf(\alpha)$ を示せば良い. $J \subset \beth_\beta$ なる共終集合について, $f: J \rightarrow \beta$ を $j \in J$ について $f(j)$ を $j \in 2^\gamma$ となる最小の $\gamma < \beta$ と定義すれば, J は β の共終集合になる. よって $cf(\beta) \leq cf(\alpha)$ となる. □

1.1.3 強極限基数

定義 11. [田中, 定義 4.5.7][強極限基数] κ が非加算強極限基数 (uncountable strong limit cardinal) であるとは

1. κ uncountable
2. $\kappa \neq 0$ かつどの順序数 α についても $\kappa \neq \alpha^+$ (limit cardinal)
3. $\lambda < \kappa$ ならば $2^\lambda < \kappa$

順序数 α について

- $\beth_0 = \aleph_0$
- $\beth_{\alpha+1} = 2^{\beth_\alpha}$
- $\beth_\alpha = \cup_{\beta < \alpha} 2^{\beth_\beta}$ α が極限数の時

と定義する \sqsubset_ω は強極限的である.

以下このノートでは κ 強極限基数といえは非加算であることを仮定する.

1.2 圏論

1.2.1 普遍射と極限

定義 12. [マックレーン, 3.1 節] $S : D \rightarrow \mathcal{C}$ 関手, $c \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ とする. c から S への普遍射とは $r \in \text{Ob}(D)$ と $u : c \rightarrow Sr$ の組み $(r, u) \in \text{Ob}(D) \times \text{hom}_{\mathcal{C}}(c, Sr)$ であって次の普遍性を満たすものである.

「任意の $d \in \text{Ob}(D)$ と $f : c \rightarrow Sd$ について, ある唯一な写像 $f' : r \rightarrow d \in \text{hom}_D(r, d)$ があって, $Sf' \circ u = f$ 」となる.

$$\begin{array}{ccc} c & \xrightarrow{u} & Sr \\ \parallel & & \downarrow Sf' \\ c & \xrightarrow{f} & Sd \end{array} \quad \begin{array}{c} r \\ \downarrow f' \\ d \end{array}$$

つまり $c \rightarrow Sd$ なる射は $Sf' \circ u$ の形に限り, この f' はただ一つに定まる.

例 13 (余極限). \mathcal{C}, \mathcal{J} を圏とする. (\mathcal{J} を添字圏とする.) $\Delta : \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{C}^{\mathcal{J}}$ を対角関手とする. つまり

- $c \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ について $\Delta c : \mathcal{J} \rightarrow \mathcal{C}$ を任意の object を c に射を id_c の送るものとする
- $f : c \rightarrow c'$ について $\Delta f : \Delta c \rightarrow \Delta c'$ となる自然変換を任意の $j \in \text{Ob}(\mathcal{J})$ について $(\Delta f)_j = f : \Delta c(j) = c \rightarrow \Delta c'(j) = c'$ とする.

$\Delta : \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{C}^{\mathcal{J}}$ 関手, $F \in \text{Ob}(\mathcal{C}^{\mathcal{J}})$ とする. F から Δ への普遍射とは $r \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ と $u : F \rightarrow \Delta r$ の組みであって次の普遍性を満たすものである.

「任意の $d \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ と $f : F \rightarrow \Delta d$ について, ある唯一な写像 $f' : r \rightarrow d \in \text{hom}_{\mathcal{C}}(r, d)$ があって, $\Delta f' \circ u = f$ 」となる.

一つずつ噛み砕いていく.

- $u : F \rightarrow \Delta r$ を与えることは J 内の $k : 1 \rightarrow 2$ について $u_i : F(i) \rightarrow r$ で $u_2 \circ F(k) = u_1 : F(1) \rightarrow r$ を与えることである.
- $f : F \rightarrow \Delta d$ を与えることは, J 内の $k : 1 \rightarrow 2$ について $f_i : F(i) \rightarrow d$ で $f_2 \circ F(k) = f_1 : F(1) \rightarrow d$ を与えることである.
- $\Delta f' \circ u = f$ となるとは, 二つはどちらも自然変換なので, $j \in \text{Ob}(\mathcal{J})$ について $f' \circ u_j = f_j$ ということである.

以上より, F から Δ への普遍射とは $r \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ と $u : F \rightarrow \Delta r$ の組みで

1. (r, u_j) のくみで, J 内の $k : 1 \rightarrow 2$ について $u_i : F(i) \rightarrow r$ で $u_2 \circ F(k) = u_1 : F(1) \rightarrow r$ が成り立ち,

2. 任意の J 内の $k : 1 \rightarrow 2$ について $f_i : F(i) \rightarrow d$ で $f_2 \circ F(k) = f_1 : F(1) \rightarrow d$ が成り立つ (d, f_j) の組みについて,
3. ある $f' : r \rightarrow d$ が存在して, 任意の j について $f' \circ u_j = f_j$ となる.

よってこの $r \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ と $u : F \rightarrow \Delta r$ の組み, 噛み砕くと, $(r, u_j : F(j) \rightarrow r)$ の組みを F の余極限という.

1.2.2 λ -フィルター余極限と λ -極限の交換

定義 14. [Shal] κ を無限基数 (cardinal) とする.

- 圏 J が κ -small とは $\text{Mor}(J) = \{f : a \rightarrow b\}$ が集合であり濃度が κ 未満であること. この時 $\text{Ob}(J)$ も濃度 κ 未満となる.
- $F : J \rightarrow C$ が κ -small limit とは J が κ -small の場合の limit とする.
- 圏 J が κ -filtered とは, 任意の κ -small 圏 I からの関手 $F : I \rightarrow J$ について, cocone $c \in \text{Ob}(J)$ と $u : F \rightarrow \Delta c$ の組が存在することとする.^aつまり次を満たす c, u が存在することとする.
 1. ある $c \in \text{Ob}(J)$ と $u_i : F(i) \rightarrow c$ の組みが存在して
 2. 任意の $f : i \rightarrow i'$ について $u_{i'} \circ F(f) = u_i : F(i) \rightarrow c$ となるもの
- $F : J \rightarrow C$ が κ -filtered limit とは J が κ -filtered category の場合の limit とする.

^acocone とは F から $\Delta : J \rightarrow J^I$ への普遍射から普遍性を除いたもの

例 15. $\omega = |\mathbb{N}|$ とする. J が ω -filtered であることは J がフィルター圏である. つまり,

1. $j, j' \in \text{Ob}(J)$ についてある $j \rightarrow k, j' \rightarrow k$ が存在する
2. $a, b : j \rightarrow k$ について, $u : k \rightarrow m$ が存在して $ua = ub : j \rightarrow k \rightarrow m$

と同値である. これは数学的帰納法からわかる.

ω -small limit は濃度 ω 未満の図式からの limit と同値であり, これは有限極限と同値である.

定理 16. λ を正則基数とする. この時 λ -filtered colimit は λ -small limit と可換である. つまり I を λ -filtered, J を λ -small として $H : I \times J \rightarrow \mathbf{Set}$ を関手としたとき canonical map

$$\Phi : \text{colim}_{i \in I} \lim_{j \in J} H(i, j) \rightarrow \lim_{j \in J} \text{colim}_{i \in I} H(i, j)$$

は全単射である.

Proof. [0] canonical map の構成 それは次の図式からわかる.

$$\begin{array}{ccccc}
H(i, j) & \longleftarrow & \lim_J H(i, j) & \longrightarrow & \operatorname{colim}_I \lim_J H(i, j) \\
\downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\
\operatorname{colim}_I F(p, j) & \longleftarrow & \lim_J \operatorname{colim}_I H(i, j) & \xlongequal{\quad} & \lim_J \operatorname{colim}_I H(i, j)
\end{array}$$

この写像は次のように書き下せる. $a \in \operatorname{colim}_{i \in I} \lim_{j \in J} H(i, j)$ とすると, $a = [(a_i, i)]$ となる $i \in I$ が取れる. 同値類の割り方は $(a_i, i) \sim (a_{i'}, i')$ は $u : i \rightarrow k, u' : i' \rightarrow k$ があって $H(u, id_j)a_i = H(u', id_j)a_{i'}$ である. $a_i \in \lim_{j \in J} H(i, j)$ なので, $a_i = (a_{ij})_{j \in J} \in \prod_{j \in J} H(i, j)$ で $u : j \rightarrow j'$ ならば $H(id_i, u)a_{ij} = a_{ij'}$ となるものである. すると各 $j \in J$ について

$$[[(a_{ij})_{j \in J}, i] \mapsto [(a_{ij}, i)]$$

という map は $\operatorname{colim}_{i \in I} \lim_{j \in J} H(i, j) \rightarrow \operatorname{colim}_{i \in I} H(i, j)$ の well-defined な map になっている. これによって

$$\Phi : [[(a_{ij})_{j \in J}, i] \mapsto [(a_{ij}, i)]_{j \in J}$$

という map を得る.

[1] $\lim_{j \in J} \operatorname{colim}_{i \in I} H(i, j)$ の元を簡単に表す $c \in \lim_{j \in J} \operatorname{colim}_{i \in I} H(i, j)$ の元は $c = (c_j)_{j \in J}$ かつ $c_j \in \operatorname{colim}_{i \in I} H(i, j)$ となるので, j に依存する $i_j \in I$ と $c_{ij} \in H(i_j, j)$ が存在して, $c = (c_j)_{j \in J} = [(c_{ij}, i_j)]_{j \in J}$ とかける.

ここで圏 J' を $Ob(J') := Ob(J)$ とし, Morphism を恒等射のみとするものとして

$$K : J' \rightarrow I \quad j \mapsto i_j$$

とおくと, J は λ -small で K は関手となるので cocone $i_{max} \in I$ が存在する. つまり $i_j \rightarrow i_{max}$ なので,

$$c = (c_j)_{j \in J} = [(c_{ij}, i_j)]_{j \in J} = [(c_{i_{max}j}, i_{max})]_{j \in J}$$

とかける. つまり元 c にはある $i \in I$ があって $c = [(c_{ij}, i)]_{j \in J}$ と書くことができる.

[2] 単射性について $\Phi(a) = \Phi(b)$ なる $a, b \in \operatorname{colim}_{i \in I} \lim_{j \in J} H(i, j)$ をとる. 示すことはある $i_0 \in I$ と $a = [a_{i_0}, i_0], b = [b_{i_0}, i_0]$ で $a_{i_0} = (a_{i_0,j})_{j \in J}, b_{i_0} = (b_{i_0,j})_{j \in J}$ と書いた時

$$a_{i_0,j} = b_{i_0,j}$$

が各 $j \in J$ で等しくなるものの存在である. [1] により共通の $i \in I$ をとって

$$\Phi(a) = [(a_{ij}, i)]_{j \in J} = [(b_{ij}, i)]_{j \in J} = \Phi(b)$$

であるとして良い. 各 $j \in J$ について

$$[(a_{ij}, i)] = [(b_{ij}, i)] \quad \text{in } \operatorname{colim}_{i \in I} H(i, j)$$

である. よって, $u : i \rightarrow i_j$ があって,

$$F(u, id_j)a_{ij} = F(u, id_j)b_{ij}$$

である. [1] と同様にしてある $i_0 \in I$ があって $i_j \rightarrow i_0$ となる. つまり $j \in J$ によらない共通の i_0 が取れる.

よって任意の $j \in J$ について, $[a_{ij}, i] = [a_{i_0j}, i_0]$ となる a_{i_0j} と b_{i_0j} があって

$$a_{i_0j} = b_{i_0j}$$

となるとして良い. $a_{i_0} = (a_{i_0j})_{j \in J}$ とおけば [2] の主張を得る.

[3] 全射性 [1] より $c \in \lim_{j \in J} \operatorname{colim}_{i \in I} H(i, j)$ の元はある $i \in I$ があって, $c = ([c_{ij}, i])_{j \in J}$ と書くことができる. よって $c_i := (c_{ij})_{j \in J}$ とおけば $c_i \in \lim_{j \in J} H(i, j)$ の元であり $[c_i, i] \in \operatorname{colim}_{i \in I} \lim_{j \in J} H(i, j)$ であるので $\Phi([c_i, i]) = c$ となる. \square

1.2.3 コンマ圏

定義 17. [マックレーン, 2.6 節] $T : \mathcal{E} \rightarrow \mathcal{C}, S : \mathcal{D} \rightarrow \mathcal{C}$ 関手としてコンマ圏 $(T \downarrow S)$ を次のように定義する.

- Object $(e, d, f) \in \operatorname{Ob}(\mathcal{E}) \times \operatorname{Ob}(\mathcal{D}) \times \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(Te, Sd)$, つまり $f : Te \rightarrow Sd$ とする.
- Morphism $(k, h) : (e, d, f) \rightarrow (e', d', f') \in \operatorname{Hom}_{\mathcal{E}}(e, e') \times \operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(d, d')$ を $k : e \rightarrow e', h : d \rightarrow d'$ で $f' \circ Tk = Sh \circ f$ となるもの

$$\begin{array}{ccccc} e & & Te & \xrightarrow{f} & Sd & & d \\ k \downarrow & & Tk \downarrow & & \downarrow Sh & & h \downarrow \\ e' & & Te' & \xrightarrow{f'} & Sd' & & d' \end{array}$$

例 18. $\mathcal{D} = \mathbf{1}$ とする. $b \in \operatorname{Ob}(\mathcal{C})$ は $b : \mathbf{1} \rightarrow \mathcal{C}$ という関手とみれる. $T : \mathcal{E} \rightarrow \mathcal{C}$ 関手としてコンマ圏 $(T \downarrow b)$ は次のようになる.

- Object $(e, 1, f) \in \operatorname{Ob}(\mathcal{E}) \times \operatorname{Ob}(\mathcal{D}) \times \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(Te, b)$, つまり $f : Te \rightarrow b$ とする.
- Morphism $(h, 1) : (e, 1, f) \rightarrow (e', 1, f') \in \operatorname{Hom}_{\mathcal{E}}(e, e') \times \operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(d, d')$ を $h : e \rightarrow e', 1 : \mathbf{1} \rightarrow \mathbf{1}$ で $f = id_b \circ f = f' \circ Tk$ となるもの

$$\begin{array}{ccccc} e & & Te & \xrightarrow{f} & b & & 1 \\ k \downarrow & & \downarrow Tk & & id_b \parallel & & 1 \downarrow \\ e' & & Te' & \xrightarrow{f'} & b & & 1 \end{array}$$

紛らわしいので 1 を消すと

- Object $(e, f) \in \operatorname{Ob}(\mathcal{E}) \times \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(Te, b)$, つまり $f : Te \rightarrow b$ とする.
- Morphism $h : (e, f) \rightarrow (e', f') \in \operatorname{Hom}_{\mathcal{E}}(e, e')$ を $k : e \rightarrow e'$ で $f = f' \circ Tk$ となるもの

そこで関手 $P : (T \downarrow b) \rightarrow \mathcal{E}$ を次で定める.

- Object $P((e, f)) = d \in Ob(\mathcal{E})$
- Morphism $P(h) = h \in Hom_{\mathcal{E}}(e, e')$

1.2.4 左 Kan 拡張

証明は Appendix の A.3.6 に右 Kan 拡張の場合だけ書いておいた.

定義 19 (左 Kan 拡張). [マックレーン, 10.3 節][alg, 2.1 節] $K : M \rightarrow C, T : M \rightarrow A$ を関手とする. K に沿った T の左 Kan 拡張とは

- 関手 $L : C \rightarrow A$
- 自然変換 $\epsilon : T \rightarrow LK$

の二つ組み $(L, \epsilon : T \rightarrow LK)$ であって, 任意の $S : C \rightarrow A, \alpha : T \rightarrow SK$ について, $\alpha = \sigma K \circ \epsilon : T \rightarrow SK$ となる自然変換 $\sigma : L \rightarrow S$ が唯一存在すること. このとき $L := Lan_K T$ とかく.

ここで $\sigma K : LK \rightarrow SK$ は $(\sigma K)_m = \sigma_{Km} : LKm \rightarrow SKm$ で定める.
 $\sigma \mapsto \sigma K \circ \epsilon$ によって自然な全単射

$$Nat(L, S) = Nat(Lan_K T, S) \cong Nat(T, SK)$$

となる. よってこれをかっこよくいうと次の補題を得る.

補題 20. $K : M \rightarrow C$ を固定する. 任意の $T \in A^M (T : M \rightarrow A)$ について左 Kan 拡張 $(L, \epsilon) := (Lan_K T \in A^C, \epsilon_T : T \rightarrow LK)$ が存在すると仮定する.

この時 $\beta : A^M \rightarrow A^C$ を以下で定める.

- $T \in A^M$ について $\beta(T) := Lan_K T$
- $g : T \rightarrow T'$ について

$$S = Lan_K T' : C \rightarrow A \quad \alpha = g \circ \epsilon_T : T \rightarrow SK$$

とおくと左 Kan 拡張の定義から, $\beta(g) : Lan_K T \rightarrow Lan_K T'$ で $\alpha = \beta(g)K \circ \epsilon_T$ となる自然変換が唯一存在する

すると $\beta : A^M \rightarrow A^C$ は

$$F_K : A^C \rightarrow A^M \quad N \mapsto N \circ K$$

の左随伴, つまり

$$Nat(Lan_K T, N) = hom_{A^C}(Lan_K T, N) \cong hom_{A^M}(T, F_K(N)) = Nat(T, NK)$$

となり, $\eta : I \rightarrow F_K \circ Lan_K$ は unit である.

定理 21 (点列極限としての左 Kan 拡張). $K : M \rightarrow C, T : M \rightarrow A$ を関手とする. 任意の $c \in Ob(C)$ について

$$T \circ P : (K \downarrow c) \rightarrow M \rightarrow A$$

に関する余極限 $\text{colim} T \circ P$ と $\mu : TP \rightarrow \Delta(\text{colim} T \circ P)$ が存在すると仮定する. このとき $L : C \rightarrow A$ を

- $c \in Ob(C)$ について, $Lc := \text{colim}(T \circ P : (K \downarrow c) \rightarrow M \rightarrow A)$
- $g : c \rightarrow c'$ について $Lg : Lc \rightarrow Lc'$ となる射

とするとこれは関手になる

さらに $\epsilon : T \rightarrow LK$ について $\epsilon_m := \mu_{id_{Km}} : Tm \rightarrow LKm$ とする. ここで

$$LKm := \text{colim} T \circ P : (K \downarrow Km) \rightarrow M \rightarrow A \quad \mu : TP \rightarrow \Delta(\text{colim} T \circ P)$$

であるので, $\epsilon_m := \mu_{id_{Km}} : Tm \rightarrow LKm$ と定義する. すると $\epsilon : T \rightarrow LK$ は自然変換になる.

そして (L, ϵ) は K に沿った T の左 Kan 拡張となる.

今回使いたいようにまとめると次の系を得る.

系 22. M が C の full sub category, つまり包含関手 $K : M \rightarrow C$ が fullyfaithfull とする. さらに M が small, A が余完備とする. この時次が成り立つ.

1. 任意の $T : M \rightarrow A$ は $K : M \rightarrow C$ に沿った左 Kan 拡張を持つ.
2. 左 Kan 拡張 $\text{Lan}_K : A^M \rightarrow A^C$ は $F_K : A^C \rightarrow A^M$ の左随伴である.
3. unit $\eta : I \rightarrow \text{Lan}_K \circ F_K$ は同型な自然変換である. 特に Lan_K は fully-faithfull である.

Proof. 左 Kan 拡張の存在は M が small, A が余完備のため. 左随伴性も良い.

$T \in A^M, m \in M$ について

$$F_K \circ \text{Lan}_K(T)(m) = \text{Lan}_K(T) \circ K(m) = \text{colim}(T \circ P : (K \downarrow Km) \rightarrow M \rightarrow A)$$

である. この余極限は Tm に等しい²よって η_T は同型射である. □

² $(n, f) \in Ob(K \downarrow Km)$ は $n \in M$ と $f : Kn \rightarrow Km$ の組だが, K が fullyfaithfull より $f = Kg$ とかける. よって (m, id_{Km}) が余極限を与える

1.2.5 表現関手と余極限

系 23. [マックレーン, 3.7 節] \mathcal{D} small $K : \mathcal{D}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}$ 反変関手, つまり $K \in \mathbf{Set}^{\mathcal{D}^{op}}$ とする. この時 K は $hom_{\mathcal{D}}(\cdot, d)$ の余極限でかける.

Proof. J をコンマ圏 $1 \downarrow K$ とする. つまり, $1 \in Ob(\mathbf{Set})$ (1 は 1 点集合のこと) $1 : 1 \rightarrow \mathbf{Set}$ という関手とみれる. $K : \mathcal{D}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}$ 関手として

- Object $(d, x) \in Ob(\mathcal{D}^{op}) \times Hom_{\mathbf{Set}}(1, Kd)$. ($x : 1 \rightarrow Kd$ とみる.)
- Morphism $h : (d, x) \rightarrow (d', x') \in Hom_{\mathcal{D}^{op}}(d, d')$ を $h : d \rightarrow d' in \mathcal{D}^{op}$ で $x' = Kh \circ x$ となるもの.

$$\begin{array}{ccccc} 1 & & 1 & \xrightarrow{x} & Kd & & d \\ & & \parallel & & \downarrow Kh & & h \downarrow \\ 1 \downarrow & & 1 & \xrightarrow{x'} & Kd' & & d' \\ & & & & & & \end{array}$$

もう少し噛み砕くと

- Object $(d, x) \in Ob(\mathcal{D}^{op}) \times Kd$. $x \in Kd \in Ob(\mathbf{Set})$ である.
- Morphism $h : (d, x) \rightarrow (d', x') \in Hom_{\mathcal{D}^{op}}(d, d')$ を $h : d \rightarrow d' in \mathcal{D}^{op}$ なる射で $x' = Kh(x)$ を満たすもの. ($Kh : Kd \rightarrow Kd'$ は集合の写像になる.)

そこで関手 $M : \mathcal{J}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}^{\mathcal{D}^{op}}$ を

- Object $(d, x) \in Ob(\mathcal{D}^{op}) \times Kd$ について $M(d, x) = hom_{\mathcal{D}}(\cdot, d)$
- Morphism $h : (d, x) \rightarrow (d', x') in \mathcal{J}^{op}$ について, $h : (d', x') \rightarrow (d, x) in \mathcal{J}$ より, $h : d' \rightarrow d in \mathcal{D}^{op}$ で $x = Kh(x')$ なるものがあり, $h : d \rightarrow d' in \mathcal{D}$ であるので,

$$Mh : M(d, x) = hom_{\mathcal{D}}(\cdot, d) \rightarrow M(d', x) = hom_{\mathcal{D}}(\cdot, d')$$

と定義できる.

$K \in Ob(\mathbf{Set}^{\mathcal{D}^{op}})$ が $M \in Psh(\mathcal{D}^{op}, \mathbf{Set})^{\mathcal{J}^{op}}$ の余極限

$$K \cong \text{colim}_{M: \mathcal{J}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}^{\mathcal{D}^{op}}} M(d, x) = \text{colim}_{M: \mathcal{J}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}^{\mathcal{D}^{op}}} hom_{\mathcal{D}}(\cdot, d)$$

であることを示す. $K \in Ob(\mathbf{Set}^{\mathcal{D}^{op}})$ と $u : M \rightarrow \Delta K$ の組みで普遍なものがあることを示せば良い ($\Delta K \in Psh(\mathcal{D}^{op}, \mathbf{Set})^{\mathcal{J}^{op}}$ に注意する)

つまり $(K, u_{(d,x)} : M(d, x) \rightarrow K)$ の組で

1. $(K, u_{(d,x)} : M(d, x) \rightarrow K)$ のくみで, \mathcal{J}^{op} 内の $h : (d, x) \rightarrow (d', x')$ について $u_{(d,x)} = u_{(d',x')} \circ M(h) : M(d, x) \rightarrow K$ が成り立ち,

2. \mathcal{J}^{op} 内の $h : (d, x) \rightarrow (d', x')$ について $f_{d,x} : M(d, x) \rightarrow L$, $f_{d',x'} : M(d', x') \rightarrow L$ で $f_{d,x} = f_{d',x'} \circ M(h) : M(d, x) \rightarrow L$ が成り立つ $(L, f_{d,x})$ の組みについて,
3. ある $f' : K \rightarrow L$ が存在して, 任意の j について $f' \circ u_{d,x} = f_{d,x}$ となる.

であることを示せば良い.

$u_{(d,x)} \in \text{Nat}(M(x, d) = \text{hom}_{\mathcal{D}}(\cdot, d), K) \cong Kd$ より $u_{(d,x)} = x$ とすれば良い. (つまり $u_{(d,x)}(c) : \text{hom}_{\mathcal{D}}(c, d) \rightarrow Kc$ を $f \mapsto (Kf)(x)$ とする) $h : (d, x) \rightarrow (d', x')$ in \mathcal{J}^{op} について, $h : d' \rightarrow \text{din}\mathcal{D}^{op}$ で $x = Kh(x')$ となる. よって $u_{(d,x)} = u_{(d',x')} \circ M(h) : M(d, x) \rightarrow K$ であることは, 任意の $c \in \mathcal{D}$, $f \in M(d, x)(c) = \text{hom}_{\mathcal{D}}(c, d)$ について

$$u_{(d',x')} \circ M(h)(f) = u_{(d',x')}(h \circ f) = K(h \circ f)(x') = Kf \circ Kh(x')Kf(x) = u_{(d,x)}(f)$$

となり言える.

(2) については $(L, f_{d,x})$ の組みについて, 自然変換 $f : K \rightarrow L$ を与えることは $d' \in \text{Ob}(\mathcal{D})$ について $f_{d'} : Kd' \rightarrow Ld'$ で可換性を満たすようなものを作れば良い. $f_{d,x} \in \text{Nat}(M(d, x), L) = \text{Nat}(\text{hom}(\cdot, d), L) \cong Ld$ より, $f_{d,x}$ は Ld の元とみなせるこれは $a \in Kd'$ について $f_{d,a}$ を返せば良い. 自然性は米田の同型を追えば良い \square

1.3 レクチャーノート 1 章 2 章の内容で今回の発表で使うもの.

定義 24. [Sch19, Definition 2.4] コンパクトハウスドルフ空間 S が extremally disconnected であるとは, 任意のコンパクトハウスドルフ空間 S' からの全射 $p : S' \rightarrow S$ について, ある $\pi : S \rightarrow S'$ が存在して $p \circ \pi = \text{id}_S$ となる.

同値な定義として, 「 $S \rightarrow A$ と全射 $B \rightarrow A$ は常にリフト $S \rightarrow B$ を持つ」とも言える.³

命題 25. [Sch19, Example 2.5] κ 強極限基数とする.
 $|S_0| < \kappa$ となる離散集合について, βS_0 を S_0 の stone cech コンパクト化とすると, βS_0 は extremally disconnected で $|\beta S_0| < \kappa$ となる.
 特に任意のコンパクトハウスドルフ空間 S に関して, extremally disconnected βS_{dist} からの全射 $\beta S_{dist} \rightarrow S$ が存在する.

以下このノートでは βS_{dist} を S に離散位相を入れた Stone Cech コンパクト化とする.

命題 26. [Sch19, Example 2.5] κ 強極限基数とする.
 $\text{ED}_{<\kappa}$ を次からなる圏とする.

- Object: extremally disconnected set で $|S| < \kappa$ となるもの.
- Morphism: 連続写像 $S \rightarrow S'$

そして $\text{Cov}(\text{ED}_{<\kappa})$ を有限個連続写像 $f_i : X_i \rightarrow Y$ で $\bigcup_{i=1}^n f_i(X_i) = Y$ となるものとする.

³ S が ED ならばリフトが存在することの証明. 全射 $B \rightarrow A$ について集合としてのリフト $S \rightarrow B$ が取れる. これにより $\beta(S_{dist}) \rightarrow B$ が作れる. $S \rightarrow \beta(S_{dist})$ なるセクションが存在するのでいえる

この時 $\mathbf{ED}_{<\kappa}$ の sheaf の圏は (profinite set の制限によって) κ -condensed set の圏と圏同値

特に κ -small condensed set $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ の圏は

$$T : \mathbf{ED}_{<\kappa}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}$$

なる関手で

1. $T(\phi) = 1pt$
2. $T(S_1 \sqcup S_2) \rightarrow T(S_1) \times T(S_2)$ が bijection

となるものとして特徴づけられる。(ED の性質により 2 つ目の条件はすぐに出る.)

以下このノートでは原則的に $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ の圏は $\mathbf{ED}_{<\kappa}^{op}$ から \mathbf{Set} への関手で上の 1.2 の条件を満たすものとする。理由としては ED の方が使いやすいからである。

命題 27. [Sch19, proposition 1.7] κ 強極限基数とする。

$$F : \mathbf{Cond}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Top}_{<\kappa} \quad T \rightarrow T(*)_{top}$$

$$G : \mathbf{Top}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\kappa} \quad X \rightarrow \underline{X} := \mathit{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(\cdot, X)$$

とする。ここで $T(*)_{top}$ は底空間 $T(*)$ に位相を

$$\sqcup_{S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}} \sqcup_{f \in T(S)} S \rightarrow T(*)$$

が商写像になるように定義する。

この時 F は G の左随伴射で counit は $\epsilon : FG \rightarrow I$ は $\epsilon_X = id_X : FG(X) = \underline{X}(*)_top \cong X^{\kappa-cg} \rightarrow X$ となる。特に

$$\mathit{hom}_{\mathbf{Top}_{<\kappa}}(T(*)_{top}, X) \cong \mathit{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\kappa}}(T, \underline{X})$$

となる。

2 [Sch19, Proposition 2.9] の解説

2.1 [Sch19, Proposition 2.9] の主張

命題 28. [Sch19, Proposition 2.9] $\kappa < \tilde{\kappa}$ を強極限基数とする。この時

$$\mathcal{F}_{\tilde{\kappa}, \kappa} : \mathbf{Cond}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}}$$

となる自然な関手が存在する。これは次で与えられる。

- $T \in \mathit{Ob}(\mathbf{Cond}_{<\kappa})$ について, $T_{\tilde{\kappa}} := \mathcal{F}_{\tilde{\kappa}, \kappa}(T) \in \mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}}$ を, 任意の $\tilde{S} \in \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}$ につ

いて

$$T_{\tilde{\kappa}} := \operatorname{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} T(S)$$

として定義する. ここで $\tilde{S} \rightarrow S$ は κ -small extremally disconnected set S への連続写像全てを回る.

- morphism $f : T \rightarrow T'$ について, $\tilde{S} \rightarrow S$ について $T(S) \rightarrow T'(S)$ が存在するので, その colim として定義する.

すると $T_{\tilde{\kappa}}$ は sheaf になり, $\mathcal{F}_{\tilde{\kappa}, \kappa} : \mathbf{Cond}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}}$ は次を満たす.

1. $\mathcal{F}_{\tilde{\kappa}, \kappa}$ は fully-faithfull である.
2. 関手 G を

$$G : \mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\kappa} \quad \tilde{T} \mapsto \tilde{T}|_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}$$

で定めると, $\mathcal{F}_{\tilde{\kappa}, \kappa}$ は G の左随伴射である. 特に colim と可換である.

3. $\lambda := cf(\kappa)$ とする時, 任意の λ -small limit と交換する.

注意 29. ショルツのレクチャーノートでは, 「 $T \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ について, $T_{\tilde{\kappa}} := \mathcal{F}_{\tilde{\kappa}, \kappa}(T) \in \mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}}$ を, 任意の $\tilde{S} \in \mathbf{Profin}_{<\tilde{\kappa}}$ について

$$T_{\tilde{\kappa}} := \operatorname{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} T(S)$$

の”sheafification”として定義する. ここで, $\tilde{S} \rightarrow S$ は κ -small profinite set S への連続写像全てを回る」として定義していた. ただこれだとすぐには λ -small limit との可換性は言えないと思う. というのも sheafification が λ -small limit との可換かはわからないからである.

ただ結論としては正しい. というのも

$$\mathit{Sh}(\mathbf{Profin}_{<\kappa}, \mathbf{Set}) \cong \mathit{Sh}(\mathbf{ED}_{<\kappa}, \mathbf{Set})$$

という圏同値があるからである.

注意 30 (Sch19. Remark 2.10). λ -small 極限の主張以外は, \mathbf{Set} ではなくても filtered colimit が常に存在する圏に値を持つ condensed object にも適応できる.

λ -small 極限に関しては \mathbf{Set} への conservative 忘却関手を持ち, limit と filtered colimit が可換になるものについては成り立つ. ここで $F : C \rightarrow D$ が conservative functor とは任意の morphism f について $F(f)$ が isom ならば f が isom なことを言う.

2.2 [Sch19, Proposition 2.9] の主張 (=命題 28) の証明

Proof of Proposition 28. 非常に長いが一つずつ噛み砕いていく.

[1] $\mathcal{F}_{\tilde{\kappa}, \kappa} : \mathbf{Cond}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}}$ の存在

[1-1] 左 Kan 拡張の存在 $T \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ とする. これは次を満たす関手である.

- $T \in \mathbf{Set}^{\mathbf{ED}_{<\kappa}^{op}}$

- $T(\emptyset) = 1$ かつ $T(S_1 \sqcup S_2) \rightarrow T(S_1) \times T(S_2)$ が bijection

そこで $K : \mathbf{ED}_{<\kappa}^{op} \rightarrow \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}^{op}$ を包含関手とする. K は fully faithful である.
すると

- K が包含関手で fully faithful.
- $\mathbf{ED}_{<\kappa}^{op}$ は small.
- \mathbf{Set} は余完備.

であるので, 21 や 22 により T の K に沿った左 Kan 拡張 $Lan_K T \in \mathbf{Set}^{\mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}^{op}}$ が存在する. そして $\tilde{S} \in \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}^{op}$ について

$$Lan_K T(\tilde{S}) = \text{colim}(T \circ P : (K \downarrow \tilde{S}) \rightarrow \mathbf{ED}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Set})$$

となる. すると 20 によって

- $Lan_K : \mathbf{Cond}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}}$ を $T \mapsto Lan_K T$
- $F_K : \mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ を $T \mapsto T \circ K$

としたとき, Lan_K は K の左随伴, つまり

$$\text{Nat}(Lan_K F, N) = \text{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\tilde{\kappa}}}(Lan_K F, N) \cong \text{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\kappa}}(F, F_K(N)) = \text{Nat}(T, NK)$$

となり, unit $\eta : I \rightarrow F_K \circ Lan_K$ は同型である.

[1-2] $\mathcal{F}_{\tilde{\kappa}, \kappa} = Lan_K$ であること

左 Kan 拡張 Lan_K を書き下していく. $(K \downarrow \tilde{S})$ の圏とは定義から次で与えられる.⁴

- Object (S_1, f_1) は $S_1 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ かつ $f_1 : KS_1 \rightarrow \tilde{S}$ の組み. $f_1 : KS_1 \rightarrow \tilde{S}$ は連続写像 $f_1 : \tilde{S} \rightarrow S_1$ と同値である.
- Morphism $h : (S_1, f_1) \rightarrow (S_2, f_2)$ を $h : S_1 \rightarrow S_2$ で $f_2 \circ Kh = f_1 : S_1 \rightarrow \tilde{S}$ となるもの. よって連続写像の言葉で直すと, $\tilde{S} \rightarrow S_2 \rightarrow S_1$ が可換になること.

図で表すと次の様になる.⁵

$$\begin{array}{ccccc}
 S_1 & & KS_1 & \xrightarrow{f_1} & \tilde{S} & & \tilde{S} \\
 \downarrow h & & \downarrow Kh & & \parallel & & \parallel \\
 S_2 & & KS_2 & \xrightarrow{f_2} & \tilde{S} & & \tilde{S} \\
 & & & & & & \\
 \mathbf{ED}_{<\kappa}^{op} & & \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}^{op} & & & & 1
 \end{array}$$

⁴ただし連続写像と $\mathbf{ED}_{<\kappa}^{op}$ の矢印を区別するため, $\mathbf{ED}_{<\kappa}^{op}$ での矢印を \rightarrow で表す. またわかりやすさのため包含写像 K もあえて書く.

⁵なぜか矢印に色がつかなかった...

そして $T \circ P : (K \downarrow \tilde{S}) \rightarrow \mathbf{ED}_\kappa \rightarrow \mathbf{Set}$ とは $(S_1, f_1) \mapsto T(K(S_1))$ であるので

$$\begin{aligned} \text{Lan}_K T(\tilde{S}) &:= \text{colim}(T \circ P : (K \downarrow \tilde{S}) \rightarrow P \rightarrow \mathbf{Set}) \\ &= \text{colim}_{f_1:K(S_1) \rightarrow \tilde{S}, S_1 \in \mathbf{ED}_\kappa} T(S_1) \\ &= \text{colim}_{f_1:\tilde{S} \rightarrow S_1, S_1 \in \mathbf{ED}_\kappa} T(S_1) \end{aligned}$$

[1-3] $\text{Lan}_K T$ が sheaf になること $T(\emptyset) = 1$ に関しては $\eta_T : T \cong \text{Lan}_K T \circ K$ より

$$\eta_T(\emptyset) : T(\emptyset) \rightarrow \text{Lan}_K T \circ K(\emptyset) = \text{Lan}_K T(\emptyset)$$

となるので一点集合である.

次に $\tilde{S}_1, \tilde{S}_2 \in \text{Ob}(\mathbf{ED}_{<\kappa})$ について $\text{Lan}_K T(\tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2) \cong \text{Lan}_K T(\tilde{S}_1) \times \text{Lan}_K T(\tilde{S}_2)$ となることを示す.

まず $K \downarrow (\tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2)$ の部分圏 J を次で定める.

- Object $(S_1 \sqcup S_2, f_1 \sqcup f_2)$ を $S_1, S_2 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ かつ連続写像 $f_1 : \tilde{S}_1 \rightarrow S_1, f_2 : \tilde{S}_2 \rightarrow S_2$ の組みとする.
- Morphism $h = g_1 \sqcup g_2 : (S_1 \sqcup S_2, f_1 \sqcup f_2) \rightarrow (S'_1 \sqcup S'_2, f'_1 \sqcup f'_2)$ とかけるものとする. ここで $g_i : S'_i \rightarrow S_i$ で $g_i \circ f'_i = f_i : \tilde{S}_i \rightarrow S'_i \rightarrow S_i$ とする.

これは確かに部分圏となっている. なぜならば $S_1, S_2 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ ならば $S_1 \sqcup S_2 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ であり, $f_1 : \tilde{S}_1 \rightarrow S_1, f_2 : \tilde{S}_2 \rightarrow S_2$ の組みがあれば

$$i_1 \circ f_1 : \tilde{S}_1 \rightarrow S_1 \sqcup S_2, \quad i_2 \circ f_2 : \tilde{S}_2 \rightarrow S_1 \sqcup S_2,$$

が定義できるので, 余積の定義から

$$f_1 \sqcup f_2 : \tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2 \rightarrow S_1 \sqcup S_2$$

が定義できるからである.

J が $K \downarrow (\tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2)$ の共終部分圏になることを示す. (共終については 87 参照.) これは共終の定義の 2 条件を満たすことを示せば良い.

(1). 任意の $(S, f) \in K \downarrow (\tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2)$ について, ある $(S_1 \sqcup S_2, f_1 \sqcup f_2)$ があって $\tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2 \leftarrow S_1 \sqcup S_2 \leftarrow S$ であること. これは連続写像に言い換えると, 任意の $f : \tilde{S} \rightarrow S$ について, $g_i : \tilde{S}_i \rightarrow S_i, h_i : S_i \rightarrow S$ があって次の図式を満たせば良い.

$$\begin{array}{ccc} & & f \\ & \curvearrowright & \\ \tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2 & \xrightarrow{g_1 \sqcup g_2} & S_1 \sqcup S_2 \xrightarrow{h_1 \sqcup h_2} S \end{array}$$

$f(\tilde{S}_1) \subset S$ を $\tilde{S}_1 \rightarrow \tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2 \xrightarrow{f} S$ の像とし, $S_1 := \beta(f(\tilde{S}_1)_{dist})$ とする.⁶すると $S_1 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ である. また $S_1 \rightarrow f(\tilde{S}_1)$ は全射かつ $\tilde{S}_1 \in \mathbf{ED}$ のため, $g_1 : \tilde{S}_1 \rightarrow S_1$ が存在する. 同様に $g_2 : \tilde{S}_2 \rightarrow S_2$ も存在する. また $h_i : S_i \rightarrow f(\tilde{S}_i) \subset S$ とする. 直和の定義をちゃんと見ればこれが可換になっている.

⁶ $\beta(f(\tilde{S}_1)_{dist})$ については 25 参照

(2). 任意の $(S, f) \in K \downarrow (\tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2)$ と $(S_1 \sqcup S_2, f_1 \sqcup f_2), (T_1 \sqcup T_2, g_1 \sqcup g_2) \in Ob(J)$ で

$$g_S : (S, f) \rightarrow (S_1 \sqcup S_2, f_1 \sqcup f_2) \quad g_T : (S, f) \rightarrow (T_1 \sqcup T_2, g_1 \sqcup g_2)$$

であったとする. そこで $W_1 := \beta((S_1 \times T_1)_{dist})$ とする. $W_1 \rightarrow S_1$ が全射なので $\tilde{S}_1 \rightarrow W_1$ を誘導し, 次の図式を得る.

$$\begin{array}{ccccc} & & S_1 & & \\ & \nearrow & \parallel & \searrow & \\ \tilde{S}_1 & \longrightarrow & S_1 & \longrightarrow & S \\ & \searrow & \uparrow & \nearrow & \\ & & W_1 & & \end{array}$$

これを $i = 2$ の場合も同様にして次の図式を得る.

$$\begin{array}{ccccc} & & S_1 \sqcup S_2 & & \\ & \nearrow & \parallel & \searrow & \\ \tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2 & \longrightarrow & S_1 \sqcup S_2 & \longrightarrow & S \\ & \searrow & \uparrow & \nearrow & \\ & & W_1 \sqcup W_2 & & \end{array}$$

これを T 側にも同じことをすると, 次の図式を得る.

$$\begin{array}{ccccccc} & & & S & & & \\ & \nearrow & & \uparrow & \searrow & & \\ S_1 \sqcup S_2 & \xlongequal{\quad} & S_1 \sqcup S_2 & \longleftarrow & W_1 \sqcup W_2 & \longrightarrow & T_1 \sqcup T_2 \xlongequal{\quad} T_1 \sqcup T_2 \end{array}$$

これにより共終の定義 87(2) を満たしていることがわかる.

よって共終と余極限の性質 88 から J での余極限に取り替えることができる. つまり

$$\begin{aligned} Lan_K T(\tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2) &= \text{colim}(T \circ P : K \downarrow (\tilde{S}_1 \sqcup \tilde{S}_2) \rightarrow P \rightarrow \mathbf{Set}) \\ &\cong \text{colim}(T \circ P : J \rightarrow P \rightarrow \mathbf{Set}) \\ &= \text{colim}_{f_1: \tilde{S}_1 \rightarrow S_1, f_2: \tilde{S}_2 \rightarrow S_2} T(S_1 \sqcup S_2) \\ &\cong \text{colim}_{f_1: \tilde{S}_1 \rightarrow S_1, f_2: \tilde{S}_2 \rightarrow S_2} T(S_1) \times T(S_2) \end{aligned}$$

となる. あとは colim と直積が可換になることを示せば良い.

そこで $R := (K \downarrow \tilde{S}_1) \times (K \downarrow \tilde{S}_2)$, $\mathbf{2} = \{1, 2\}$ とし関手 $G : R \times \mathbf{2} \rightarrow \mathbf{Set}$ を

$$G(S_1, f_1, S_2, f_2, 1) := T(S_1) \quad G(S_1, f_1, S_2, f_2, 2) := T(S_2)$$

として定義する. $(K \downarrow \tilde{S}_1)$ は [2-2] より λ -filtered となるので, R も λ -filtered. また $\mathbf{2}$ は λ -small

である. よって λ は正則より 16 から極限と余極限を交換できて

$$\operatorname{colim}_R \lim_2 G(S_1, f_1, S_2, f_2, i) \cong \lim_2 \operatorname{colim}_R G(S_1, f_1, S_2, f_2, i)$$

である. $\lim_2 G(S_1, f_1, S_2, f_2, i) = T(S_1) \times T(S_2)$ であることに注意すれば

$$\begin{aligned} \operatorname{colim}_{f_1: \tilde{S}_1 \rightarrow S_1, f_2: \tilde{S}_2 \rightarrow S_2} T(S_1) \times T(S_2) &= \operatorname{colim}_R \lim_2 G(S_1, f_1, S_2, f_2, i) \\ &\cong \lim_2 \operatorname{colim}_R G(S_1, f_1, S_2, f_2, i) \\ &= \operatorname{colim}_R G(S_1, f_1, S_2, f_2, 1) \times \operatorname{colim}_R G(S_1, f_1, S_2, f_2, 2) \\ &= \operatorname{colim}_{f_1: \tilde{S}_1 \rightarrow S_1} T(S_1) \times \operatorname{colim}_{f_2: \tilde{S}_2 \rightarrow S_2} T(S_2) \\ &= \operatorname{Lan}_K T(\tilde{S}_1) \times \operatorname{Lan}_K T(\tilde{S}_2) \end{aligned}$$

となる. よって sheaf になる.

[1-4] 関手になること これは 20 と [1-1] よりすでに言えている.

[2] 各種の条件に関して

[2-1] fullyfaithfull と左随伴性について

[1-1] により, $\operatorname{unit} \eta : I \rightarrow F_K \circ \operatorname{Lan}_K$ は同型である. よって unit が同型なので Lan_K は fully faithfull である.(93 参照.) 左随伴性もすでに言えている.

[2-2] $\lambda = cf(\kappa)$ -small limit と交換すること. I を λ -small な圏とする. 示すことは

$$\operatorname{Lan}_K(\lim_{i \in I} T_i) \cong \lim_{i \in I} (\operatorname{Lan}_K T_i)$$

である. つまり $\tilde{S} \in \operatorname{Ob}(\mathbf{ED}_{<\kappa}^{op})$ について

$$\operatorname{Lan}_K(\lim_{i \in I} T_i)(\tilde{S}) := \operatorname{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} (\lim_{i \in I} (T_i(S))) \cong \lim_{i \in I} (\operatorname{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} (T_i(S))) =: \lim_{i \in I} (\operatorname{Lan}_K T_i)(\tilde{S})$$

を示せば良い. よって任意の $\tilde{S} \in \operatorname{Ob}(\mathbf{ED}_{<\kappa}^{op})$ について

$$G : I \times (K \downarrow \tilde{S}) \rightarrow \mathbf{Set} \quad (i, (S, f)) \mapsto G(i, (S, f)) = T_i(S)$$

とおいたときに

$$\operatorname{colim}_{(S, f) \in K \downarrow \tilde{S}} (\lim_{i \in I} G(i, (S, f))) \cong \lim_{i \in I} (\operatorname{colim}_{(S, f) \in K \downarrow \tilde{S}} (G(i, (S, f))))$$

であることを示せば良い. $\lambda = cf(\kappa)$ は正則基数なので $K \downarrow \tilde{S}$ が λ -filtered であることを示せば定理 16 から極限と余極限を交換できて上が従う.

任意の λ -small な圏 J とその関手 $H : J \rightarrow K \downarrow \tilde{S}$ について, $\operatorname{cocone} (S, f) \in K \downarrow \tilde{S}$ と $u : H \rightarrow \Delta(S, f)$ の組が存在することを示す. $j \in H$ について $H(j) = (S_j, f_j)$ とする. $S_j \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ かつ $f_j : S_j \rightarrow \tilde{S}$ とする. そこで (S_j, f_j) の位相空間としての極限

$$S_0 := \lim_{j \in J} S_j$$

をとる. 極限の定義から連続写像 $f_0 : \tilde{S} \rightarrow S_0$ があるので $f_0 : S \rightarrow \tilde{S}$ となる.⁷

まず $|S_0| < \kappa$ であることを示す. $\mu := \sup_{j \in J} |S_j|$ とおく. すると 9 より $\mu < \kappa$ である. よって S_0 の濃度は

$$\begin{aligned} |S_0| &= |\lim_{j \in J} S_j| \leq |\prod_{i \in J} S_j| && (\text{lim の定義}) \\ &\leq \mu^\lambda && (|S_i| \leq \mu \text{ と } J \rightarrow \cup_j S_j) \\ &\leq (2^\mu)^\lambda && (\mu < 2^\mu) \\ &\leq 2^{\mu \cdot \lambda} && (\text{積の法則}) \\ &< \kappa && (\mu \cdot \lambda < \kappa \text{ と } \kappa \text{ 強極限}) \end{aligned}$$

となる. (途中で $\mu \cdot \lambda = \max\{\mu, \lambda\} < \kappa$ を用いた.⁸)

$S := \beta(S_{0dist})$ とする. $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ であり全射 $g : S \rightarrow S_0$ が存在する. 連続写像の図で書くと次のようになる.

$$\begin{array}{ccccc} \tilde{S} & \xrightarrow{f_0} & S_0 := \lim_{j \in J} S_j & \xrightarrow{f_1} & S_1 \\ & \searrow \text{---} f \text{---} & \uparrow g & \searrow f_2 & \uparrow \\ & & S := \beta(S_{0dist}) & & S_2 \end{array} \quad (1)$$

そこで $f : \tilde{S} \rightarrow S$ を \tilde{S} の ED 性から誘導される連続写像とする. さらに $u_j := f_j \circ g : S \rightarrow S_j$ とおく. この (S, f) と $u = \{u_j\}_{j \in J}$ が J とその関手 $H : J \rightarrow K \downarrow \tilde{S}$ についての $\text{cocone}(S, f) \in K \downarrow \tilde{S}$ と $u : H \rightarrow \Delta(S, f)$ の組みである. それは以下の 2 条件が成り立つからである

(1.) $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ であり $f : \tilde{S} \rightarrow S$ であるので $f : S \rightarrow \tilde{S}$ となり, $(S, f) \in \text{Ob}(K \downarrow \tilde{S})$ となる.

(2.) $u : H \rightarrow \Delta(S, f)$ であることは, 任意の $k : 1 \rightarrow 2$ について $u_2 \circ H(k) = u_1 : (S_1, f_1) \rightarrow (S, f)$ であることを示せば良い. 連続写像の言葉で書くと (1) の図を参考にすれば

$$H(k) \circ u_2 = (S_2 \rightarrow S_1) \circ (f_2 \circ g) = f_1 \circ g = u_1$$

となるので, 双対 (op) を考えれば言える. □

3 強極限基数によらない Condensed set の定義と性質. [Sch19, Definition 2.11] の解説

定義 31. [Sch19, Definition 2.11] condensed set の圏 \mathbf{Cond} を "filtered colimit of $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ along filtered poset of all κ " とする.

つまり \mathbf{Cond} の Object T とは次を満たすものである.

1. $T : \mathbf{ED}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}$ なる関手
2. $T(\phi) = 1$ かつ $T(S_1 \sqcup S_2) \cong T(S_1) \times T(S_2)$

⁷ただし S_0 は Extremally disconnected とは限らない.

⁸ μ, λ がともに有限の時は $\mu \cdot \lambda < \kappa$ は明らか.

3. ある強極限基数 κ と $T_\kappa \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ があって, $T = \mathit{Lan}_K T_\kappa$ とかける. ここで $K : \mathbf{ED}_{<\kappa}^{op} \rightarrow \mathbf{ED}^{op}$ を包含関手とする.

また morphism を $T \rightarrow T'$ となる自然変換で定める.

(3) の条件のおかげで集合論的な問題を解決することができる.⁹

注意 32. [Sch19, Remark 2.12, 2.13]

- \mathbf{Cond} は laege category で generator の集合を持つとは限らない
- \mathbf{Cond} は site 上の sheaf とも限らない

補題 33. [Sch19, Remark 2.13] \mathbf{Cond} は任意の small limit と small colimit が存在する. つまり J を小さい圏とし関手 $F : I \rightarrow \mathbf{Cond}$ とした時, ある強極限基数 κ で $F(i) = \mathit{Lan}_K T_i$ となる $T_i \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ が存在する. そして次が成り立つ.

- $\lim_{i \in I} T_i$ は各点で計算できる. つまり $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について

$$(\lim_{i \in I} T_i)(S) = \lim_{i \in I} T_i(S)$$

である. $\lim_{i \in I} F_i$ は $\mathit{Lan}_K(\lim_{i \in I} T_i)$ で与えられ, $\kappa < \tilde{\kappa}$ かつ $\tilde{S} \in \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}$ について

$$(\lim_{i \in I} F_i)(\tilde{S}) = \lim_{i \in I} \mathit{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} T_i(S)$$

となる.

- $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ での余極限は Presheaf としての余極限 $T := \mathit{colim}_{i \in I} T_i$ を sheafification として与えられる. それを T^\sharp とすると \mathbf{Cond} での余極限は $\mathit{colim}_{i \in I} F_i := \mathit{Lan}_K T^\sharp$ で与えられる.
- I が filtered category ならば, sheaf としての余極限は各点で計算できる. つまり $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について

$$(\mathit{colim}_{i \in I} T_i)(S) = \mathit{colim}_{i \in I} (T_i(S))$$

となる, また $\mathit{colim}_{i \in I} F_i$ は $\mathit{Lan}_K(\mathit{colim}_{i \in I} T_i)$ で与えられ, $\kappa < \tilde{\kappa}$ かつ $\tilde{S} \in \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}$ について

$$(\mathit{colim}_{i \in I} F_i)(\tilde{S}) = \mathit{colim}_{i \in I} \mathit{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} T_i(S)$$

となる.

ここで sheafification とその性質についておさらいしておく.

⁹松澤さんから「(3) の条件から (2) は従うのでは?」と指摘された. 確かに左 Kan 拡張が自動的に sheaf になるので, (2) は不要な気がする.

定理 34. [Sha2] C small category with topology とする. $Psh(C) := \mathbf{Set}^C$ とし, $Sh(C)$ を \mathbf{Set} に値を持つ sheaf とする.

このとき自然な関手 sheafification $\# : Psh(C) \rightarrow Sh(C)$ が存在する. さらに包含関手 $i : Sh(C) \rightarrow Psh(C)$ の左随伴射であり

$$\text{hom}_{Sh(C)}(F^\#, G) \cong \text{hom}_{Psh(C)}(F, i(G))$$

が成り立つ. また有限 limit と可換になる.

補題 35. [Sta, 00WK Lemma 10.15] C を small category with topology とし, $\mathcal{F} \in \mathbf{Set}^C$ とする. また $\# : \mathcal{F} \mapsto \mathcal{F}^\#$ を sheafification とする.

任意の $U \in \text{Ob}(C)$ と $s \in \mathcal{F}^\#(U)$ について covering $\{U_i \rightarrow U\}$ と $s_i \in \mathcal{F}(U_i)$ が存在して

1. $s|_{U_i} = \#(U_i)(s_i)$
2. 任意の i, j についてある covering $U_{ijk} \rightarrow U_i \times_U U_j$ があって $s_i|_{U_{ijk}} = s_j|_{U_{ijk}}$ となる.

そして任意の covering $\{U_i \rightarrow U\}$ で (2) を満たすものについて (1) を満たす s は唯一である.

Proof of 33. [0] 強極限基数 κ の存在 I を小さい圏とし関手 $F : J \rightarrow \mathbf{Cond}$ とする. $|Mor(I)| < cf(\kappa) \leq \kappa$ となる強極限基数 κ で $F(i) = \text{Lan}_K T_i$ となる $T_i \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ となるものが存在する. これは $F(i) = \text{Lan}_K T_i \in \mathbf{Cond}_{<\kappa_i}$ となる一番小さい基数を κ_i とすると κ_i は集合なので集合 $\prod_{i \in I} \kappa_i$ が存在する. そこで 10 より $|\prod_{i \in I} \kappa_i| < cf(\kappa) \leq \kappa$ となる κ をとれば $\kappa_i \rightarrow \prod_{i \in I} \kappa_i$ となる単射が存在するので $\kappa_i \leq |\prod_{i \in I} \kappa_i| < \kappa$ である.

[1] lim に関して

[1-1] Presheaf としての極限 $\lim_{i \in I} T_i$ が Sheaf としての極限になること.

Presheaf としての極限は

$$(\lim_{i \in I} T_i)(X) := \lim_{i \in I} (T_i(X))$$

であることに注意する. これが sheaf の条件を満たすことを示せば良い. $X_1, X_2 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について, 極限と極限は交換することから¹⁰.

$$(\lim_{i \in I} T_i)(X_1 \sqcup X_2) := \lim_{i \in I} (T_i(X_1 \sqcup X_2)) \cong \lim_{i \in I} (T_i(X_1) \times T_i(X_2)) \cong \lim_{i \in I} (T_i(X_1)) \times \lim_{i \in I} (T_i(X_2))$$

[1-2] \mathbf{Cond} での極限について $T = \lim_{i \in I} T_i \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ として $\text{colim}_{i \in I} F_i := \text{Lan}_K T$ と定義する. 左 Kan 拡張と $cf(\kappa)$ -small limit は 28 より可換なので,

$$\text{Lan}_K T = \text{Lan}_K (\lim_{i \in I} T_i) \cong \lim_{i \in I} (\text{Lan}_K T_i) = \lim_{i \in I} F(i)$$

となる. よって $\text{Lan}_K T$ は F の極限である. また

$$(\lim_{i \in I} F(i))(\tilde{S}) \cong (\text{Lan}_K T)(\tilde{S}) = \text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} T(S) = \text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} \lim_{i \in I} T_i(S) \cong \lim_{i \in I} \text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} T_i(S)$$

¹⁰ncatlab によると \lim を右随伴として見れるから.

となるので各点で計算できる。(極限の交換は 28 の証明より)

[2] 余極限について

[2-1] $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ での余極限 Presheaf としての余極限 $T := \text{colim}_{i \in I} T_i$ とする. これは必ずしも sheaf になるとは限らないので, sheafification したものを T^\sharp とおく. これが sheaf としての colim になることは, sheafification $\sharp : \mathbf{Psh}(\mathbf{Set}) \rightarrow \mathbf{sh}(\mathbf{Set})$ が左随伴射なので colim と可換であり

$$(\text{colim}_{i \in I \text{ in Psh}} T_i)^\sharp \cong \text{colim}_{i \in I \text{ in sh}} (T_i)^\sharp = \text{colim}_{i \in I \text{ in sh}} T_i$$

となるからである. ("in Psh" は presheaf での余極限の意味)

[2-2] \mathbf{Cond} での余極限 これは左 Kan 拡張が colim と可換であることから $\text{colim}_{i \in I} F_i := \text{Lan}_K T^\sharp$ である.

[3] I が filtered のとき

このとき Presheaf としての余極限 $\text{colim} T_i$ が sheaf になる. 実際 $X_1, X_2 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について

$$\begin{aligned} (\text{colim}_{i \in I} T_i)(X_1 \sqcup X_2) &:= \text{colim}_{i \in I} (T_i(X_1 \sqcup X_2)) \\ &\cong \text{colim}_{i \in I} (T_i(X_1) \times T_i(X_2)) \cong \text{colim}_{i \in I} (T_i(X_1)) \times \text{colim}_{i \in I} (T_i(X_2)) \end{aligned}$$

となる. 最後の同型に関してはフィルター余極限と有限極限は交換することから. 各点で計算できることも [1-2] と同じである. \square

定義 36. C を任意の filtered colimit を持つ圏として, $\mathbf{Cond}(C)$ も同様に定義する. つまり $\mathbf{Cond}(C)$ の Object T とは次を満たすものである.

- $T : \mathbf{ED}^{op} \rightarrow C$ なる関手
- $T(\emptyset) = 1$ かつ $T(S_1 \sqcup S_2) \cong T(S_1) \times T(S_2)$
- ある強極限基数 κ と $T_\kappa \in \mathbf{Cond}(C)_{<\kappa}$ があって, $T = \text{Lan}_K T_\kappa$ とかける. ここで $K : \mathbf{ED}_{<\kappa}^{op} \rightarrow \mathbf{ED}^{op}$ を包含関手とする.

これは左 Kan 拡張が存在するためである. (余極限でなくてもフィルター余極限の存在でいいのは証明から.)

補題 37. $\mathbf{Cond}(C)$ は locally small

Proof. $F \in \mathbf{Cond}(C)$ をとると, 強極限基数 κ と $T \in \mathbf{Cond}(C)_{<\kappa}$ があって, $F = \text{Lan}_K T$ となる. すると $\kappa < \lambda$ について

$$T = \text{Lan}_{K: \mathbf{ED}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{ED}} T = \text{Lan}_{K: \mathbf{ED}_{<\lambda} \rightarrow \mathbf{ED}} (\text{Lan}_{K: \mathbf{ED}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{ED}_{<\lambda}} T)$$

となる. これは $\tilde{S} \in \mathbf{ED}$ を代入すればわかる. ¹¹

上により任意の $F_1, F_2 \in \mathbf{Cond}(C)$ とすると, 強極限基数 κ と $T_i \in \mathbf{Cond}(C)_{<\kappa}$ があって, $F_i = \text{Lan}_K T_i$ とかけるとして良い. ここで $K : \mathbf{ED}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{ED}$ を包含関手とする. Lan_K は左随伴

¹¹おそらく共終性からとも言える.

であり, unit $\eta : I \cong F_K \circ Lan_K$ が同型なので,

$$\begin{aligned} hom_{\mathbf{Cond}(C)}(F_1, F_2) &= hom_{\mathbf{Cond}(C)}(Lan_K T_1, Lan_K T_2) \\ &\cong hom_{\mathbf{Cond}(C)_{<\kappa}}(T_1, (F_K \circ Lan_K)T_2) \cong hom_{\mathbf{Cond}(C)_{<\kappa}}(T_1, T_2) \end{aligned}$$

となり, $hom_{\mathbf{Cond}(C)_{<\kappa}}(T_1, T_2)$ は集合なので, $hom_{\mathbf{Cond}(C)}(F_1, F_2)$ もそうなる. \square

注意 38. hom 集合の同型 $hom_{\mathbf{Cond}(C)_{<\kappa}}(T_1, T_2) \cong hom_{\mathbf{Cond}(C)}(T_1, T_2)$ から κ を止めて議論して良いことがわかる. つまり左 Kan 拡張 Lan_K によって fully-faithfull な包含射 $\mathbf{Cond}(C)_{<\kappa} \subset \mathbf{Cond}(C)$ が存在する.

4 Condensed Set にならない $\underline{X} = hom_{\mathbf{ED}}(\cdot, X)$ の例. [Sch19, Warning 2.14] の解説.

31 と用いると Condensed set を \mathbf{CHaus} 上の sheaf としても定義できる. つまり Condensed set とは次を満たす関手としても見ることができる.

- $T : \mathbf{CHaus}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}$ なる関手
- sheaf 条件を満たす. つまり以下を満たす.
 1. $T(\emptyset) = 1$
 2. $T(S_1 \sqcup S_2) \cong T(S_1) \times T(S_2)$
 3. $S' \rightarrow S$ を全射として, 下の写像が全単射になる.

$$T(S) \rightarrow \{x \in T(S') \mid p_1^* x = p_2^* x \in T(S' \times_S S')\} =: eq(T(S') \begin{matrix} p_1 \\ \downarrow \\ T(S' \times_S S') \\ \downarrow \\ p_2 \end{matrix})$$

- ある強極限基数 κ と, $\mathbf{CHaus}_{<\kappa}$ 上の sheaf T_κ があって, $T = (Lan_K T_\kappa)^\sharp$ とかける. ここで $K : \mathbf{ED}_{<\kappa}^{op} \rightarrow \mathbf{ED}^{op}$ を包含関手, \sharp を sheafification とする.

これは $\mathbf{CHaus}_{<\kappa}$ 上に grothendieck 位相を入れたものの sheaf の圏と $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ が圏同値であることからわかる. このことを用いると次が言える.

命題 39. [Sch19, Warning 2.14] X を Sierpinski 空間, つまり $\{0, 1\}$ に位相 $\{\emptyset, \{0\}, \{0, 1\}\}$ を入れたものとする.

$hom_{\mathbf{CHaus}}(\cdot, X) : \mathbf{CHaus}^{op} \rightarrow \mathbf{Set}$ は condensed set にならない.

$hom_{\mathbf{CHaus}}(\cdot, X)$ は任意の強極限基数 κ について κ -condensed set にはなっていない. ただ $hom_{\mathbf{CHaus}}(\cdot, X) = (Lan_K T)^\sharp$ となる κ や $T \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ が存在しないということになる. (つまり 31 の 3 つ目の条件を満たさない)¹²

¹²[Sch19, Warning 2.14] にはお気持ちしか書いていないので, 勉強会で証明をうめた. Condensed set を \mathbf{CHaus} の上で定義したのはこの命題で用いるためである.

Proof. [0]Setup 背理法で証明する. もし condensed set になるならある強極限基数 κ があって任意の $|\tilde{S}| > \kappa$ となる集合 \tilde{S} について,

$$\text{hom}_{\mathbf{CHaus}}(\tilde{S}, X) \cong \left(\text{Lan}_K \text{hom}_{\mathbf{CHaus}_{<\kappa}}(\cdot, X)^\# \right) (\tilde{S})$$

は同型となる. sheafification の性質 35 から任意の $f \in \text{hom}_{\mathbf{CHaus}}(\tilde{S}, X)$ についてある covering $h: \tilde{S}_0 \rightarrow \tilde{S}$ があって $f|_{\tilde{S}_0} \in \text{Lan}_K \text{hom}_{\mathbf{CHaus}_{<\kappa}}(\tilde{S}_0, X)$ となる. つまり $f \circ h: \tilde{S}_0 \rightarrow X$ はある $S \in \mathbf{CHaus}_{<\kappa}$ を経由する.

そこで $\kappa < \nu$ となる強極限基数をとり次の様に定める.

- $\tilde{S} := \prod_{i < \kappa + \nu} \{0, 1\} = \{0, 1\}^{\kappa + \nu}$ ¹³ で $\{0, 1\}$ には離散位相, \tilde{S} には積位相を入れる.
- $Z := \bigcap_{\kappa \leq i < \kappa + \nu} p_i^{-1}(0) = \{0, 1\}^\kappa \times \{0\}^\nu$. ここで $i < \kappa + \nu$ について $p_i: \tilde{S} \rightarrow \{0, 1\}$ を射影とする. 直積の定義より \tilde{S} の閉集合である.
- $f: \tilde{S} \rightarrow X$ を Z の特性関数とする. $\{1\} \subset X$ は X の閉集合なので, これは連続写像である.

[1] Z がただか κ 以下個の開集合の intersection で書けることを示す.

背理法の仮定より, 全射 $h: \tilde{S}_0 \rightarrow \tilde{S}$, $S \in \mathbf{CHaus}_{<\kappa}$ があって, $f \circ h = \pi \circ f_S$ となる. ここで $\tilde{S}_0 \xrightarrow{\pi} S \xrightarrow{f_S} X$ である.

$$\begin{array}{ccc} \tilde{S}_0 & \xrightarrow{\pi} & S \\ h \downarrow & & f_S \downarrow \\ \tilde{S} & \xrightarrow{f} & X \end{array}$$

すると

$$\tilde{S}_0 \setminus h^{-1}(Z) = \tilde{S}_0 \setminus \pi^{-1} f_S^{-1}(0) = \pi^{-1} f_S^{-1}(0) = \bigcup_{x \in f_S^{-1}(0)} \pi^{-1}(x)$$

よって $\tilde{S} \setminus Z = \bigcup_{x \in f_S^{-1}(0)} h(\pi^{-1}(x))$ となるので

$$Z = \bigcap_{x \in f_S^{-1}(0)} h(\pi^{-1}(x))^c$$

である. $h: \tilde{S}_0 \rightarrow \tilde{S}$ は閉写像であることを用いると, $h(\pi^{-1}(x))^c$ は開集合である. $|f_S^{-1}(0)| \leq |S| < \kappa$ より [1] の主張が言えた.

[2] 矛盾を導く [1] より任意の $\alpha < \kappa$ なる順序数について開集合 $U_\alpha \subset \tilde{S}$ があって $Z = \bigcap_{\alpha < \kappa} U_\alpha$ となる. $\{0\}^{\kappa + \nu} \in Z$ なので $\{0\}^{\kappa + \nu} \in U_\alpha$ である. よって積位相の定義より, 有限個の j_1, \dots, j_{N_α} と部分集合 $F_{j_k} \subset \{0, 1\}$ があって

$$\{0\}^{\kappa + \nu} \in \bigcap_{k=1}^{N_\alpha} p_{j_k}^{-1}(F_{j_k}) \subset U_\alpha$$

¹³ $\kappa + \nu = \nu$ だがあえてこう書いている.

となる. α に関して共通部分を取ると

$$\bigcap_{\alpha < \kappa} \bigcap_{k=1}^{N_\alpha} p_{j_k}^{-1}(F_{j_k}) \subset \bigcap_{\alpha < \kappa} U_\alpha = Z = \{0, 1\}^\kappa \times \{0\}^\nu \quad (2)$$

となる. そこで

$$\Lambda := \{i < \kappa + \nu \mid i = j_k \text{ となる順序数 } \alpha \text{ と } 1 \leq k \leq N_\alpha \text{ が存在する}\}$$

とおく. (2) から $i \notin \Lambda$ ならば $p_i(\bigcap_{\alpha < \kappa} U_\alpha) = \{0, 1\}$ より $p_i(Z) = \{0, 1\}$ である. よって $i < \kappa$ となる

以上より $\kappa \leq i < \kappa + \nu$ ならば $i \in \Lambda$ である. 特に $\nu \leq |\Lambda|$ となる. しかし

$$\nu \leq |\Lambda| \leq \kappa \cdot |\mathbb{N}| = \kappa$$

であるので矛盾. □

5 Cond と位相空間との対応. [Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16] の解説.

5.1 $T(*)_{top}$ の定義

補題 40. [Sch19] $T \in \mathbf{Cond}$ について $T(*)_{top}$ という位相空間を次で定義する.

- 底空間を $T(*) \in \mathbf{Set}$ とする.
- 位相を $T = \mathbf{Lan}_K T_\kappa$ となる強極限基数 κ を一つとり,

$$\pi : \bigsqcup_{S \in \mathbf{ED}_{< \kappa}} \bigsqcup_{f \in T(S)} S \rightarrow T(*)$$

として定義する.

このとき, この位相は κ の取り方によらない.

Proof. [1] 位相の定義について $S \in \mathbf{ED}_{< \kappa}$ と $f \in T(S)$ について, $f \in T(S) \cong \mathbf{Nat}(\underline{S}, T)$ であるので, $f(*) : \underline{S} \rightarrow T$ となる¹⁴

これを用いて $\pi : \bigsqcup_{S \in \mathbf{ED}_{< \kappa}} \bigsqcup_{f \in T(S)} S \rightarrow T(*)$ が定まる. この π は全射である. なぜなら $x \in T(*)$ について $x : * \rightarrow T$ を考えれば, $x(*) : * \rightarrow T$ の像は $\{x\}$ である.

[2] 基数の取り方によらないこと. $\kappa < \lambda$ となる強極限基数をとる. $T = \mathbf{Lan}_K T_\kappa = \mathbf{Lan}_K T_\lambda$ となるので, $T_\lambda = \mathbf{Lan}_K T_\kappa$ となる.

$$\pi_\kappa : \bigsqcup_{S \in \mathbf{ED}_{< \kappa}} \bigsqcup_{f \in T_\kappa(S)} S \rightarrow T(*)$$

¹⁴[Bar22] では $f : S \rightarrow T(*)$ を次で定めていた: $x \in S$ は $x : * \rightarrow S$ を定めるので, $T(x) : T(S) \rightarrow T(*)$ を定め, $f(x) := T(x)(f)$ として定める. これは米田の定理から任意の $S' \in \mathbf{ED}$ について $f_{S'} : \mathbf{hom}(S', S) \rightarrow T$ $g \mapsto T(g)(f)$ を定めるため同値である.

とおきこれによって入れた位相の開集合系を \mathcal{O}_κ とする. \mathcal{O}_λ も同様に定める. λ の方が大きいいため $\mathcal{O}_\lambda \subset \mathcal{O}_\kappa$ がわかる. 逆側の包含を言えば良い.

$V \in \mathcal{O}_\kappa$ とする. 任意の $\tilde{S} \in \mathbf{ED}_\lambda$ と $f \in T_\lambda(\tilde{S})$ をとる.

$$T_\lambda(\tilde{S}) = \text{Lan}_K T_\kappa(\tilde{S}) = \text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S} T_\kappa(S)$$

であるので, f は $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ を経由する ($\tilde{S} \rightarrow S \rightarrow T(*)$). $S \rightarrow T(*)$ の V の逆像は開集合なので, $f^{-1}(V)$ も開集合となる. \square

注意 41. $T \rightarrow T(*)_{\text{top}}$ は functorial でもなければ, 任意の位相空間 X について $X(*)_{\text{top}}$ は X と同相とも限らない. また condensed set について $\text{hom}_{\mathbf{Cond}}(T, \underline{X})$ と $\text{hom}_{\mathbf{Top}}(T(*)_{\text{top}}, X)$ の adjunction も成り立たない (というか adjunction というものをそもそも定義できない)

系 42. condensed set の射 $f : S \rightarrow T$ について $f(*) : S(*)_{\text{top}} \rightarrow T(*)_{\text{top}}$ は連続写像である.

Proof. 基数 κ で $S, T \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ なるものを取る. $U \subset T(*)_{\text{top}}$ を開集合とする. $f(*)^{-1}V$ が $S(*)_{\text{top}}$ で開集合であることを示す. つまり任意の $X \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ と $h \in S(X)$ で $h(*) : X \rightarrow S$ について $h(*)^{-1}(f(*)^{-1}V)$ が X の開集合であることを示せば良い. これは $f \circ h \in T(X)$ となることから明らかである. \square

5.2 用語 (qc, qs, T_1 , WH) の解説

5.2.1 qc, qs, T_1

定義 43 (quasi-compact, quasi-separated, T_1). T を condensed set とする.

- T が quasi-compact (qc) とは, 任意の小さな圏 I と関手 $S : I \rightarrow \mathbf{Cond}$ で $f_i : S_i \rightarrow T$ かつ $\sqcup f_i : \sqcup_{i \in I} S_i \rightarrow T$ が epi 射になるものについて, ある有限集合 $I' \subset I$ が存在して $\sqcup f_{i'} : \sqcup_{i' \in I'} S_{i'} \rightarrow T$ が epi 射になること.
- T が quasi-separated (qs) とは, 任意の qc condensed set S_1, S_2 で $S_1 \rightarrow T, S_2 \rightarrow T$ となるものについて, $S_1 \times_T S_2$ もまた qc となること.
- T が T_1 とは任意の一点からの射が quasi-compact となること. つまり任意の qc condensed set S_1 で $S_1 \rightarrow T$ と, 任意の射 $* \rightarrow T$ について, $S_1 \times_T *$ もまた qc となること

注意 44. Scholze の lecture ノート [Sch19] では T_1 のことを「任意の一点からの射が quasi-compact」と書いていた. ただ調べても射が quasi-compact の定義が出なかった. (SGA に書いてある?) おそらく stack などでの射の quasi-compact の定義が上のものと同値であるので, 今回は上の意味で T_1 を定義した.

5.2.2 コンパクト生成空間 (CG), 弱ハウスドルフ (WH), CGWH

定義 45. [Str, Definition 1.1 ,1.2] X を位相空間とし, \mathfrak{B} を X の閉集合系とする.

1. $Y \subset X$ が k -closed とは任意のコンパクトハウスドルフ空間 K からの連続写像 $u : K \rightarrow X$ について $u^{-1}Y$ が閉集合となるもの.
2. X がコンパクト生成空間 (CG) とは $X = kX$ となる位相空間である. ここで k -closed 集合を $k\mathfrak{B}$ と表し, kX を $(X, k\mathfrak{B})$ という位相空間とする.
3. X が weak Hausdorff(WH) とは任意のコンパクトハウスドルフ空間 K からの連続写像 $u : K \rightarrow X$ について $u(K)$ が閉集合となるもの

例 46 (WH の例). ハウスドルフならば Weak ハウスドルフ. (ハウスドルフ空間のコンパクト集合は閉集合より)

Weak ハウスドルフならば, T_1 空間. これは一点集合からの射を考えれば良い.

例 47 (CG の例). 第一可算集合は CG.

例 48 (CGWH の例). 距離空間, locally compact Hausdorff, CW complex などなど

注意 49. CG 空間の圏 CG や CGWH の圏 CGWH は complete, cocomplete, cartesian closed であることが知られている.

上の例・注意に関しては詳しい説明を Appendix A.2 にまとめておいた.

5.3 [Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16] の主張

定理 50. [Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16] X を位相空間, T を condensed set とする

1. X が T_1 空間ならば $\underline{X} := \text{hom}_{\text{ED}}(\cdot, X)$ は condensed set になり T_1 である.
2. 逆に T が T_1 ならば $T(*)_{\text{top}}$ も T_1 空間になる.
3. $G : X \rightarrow \underline{X}$ によって \mathbf{CHaus} から $\mathbf{qcqsCond}$ への圏同値を与える. つまり次が成り立つ.
 - (a) X がコンパクトハウスドルフならば \underline{X} は qcqs である.
 - (b) $G : \mathbf{CHaus} \rightarrow \mathbf{qcqsCond}$ は fully faithful である
 - (c) T が qcqs ならば $T \cong \underline{Y}$ となるコンパクトハウスドルフ空間が存在する.
4. X をコンパクト生成空間 (CG) とする. このとき X が weak Hausdorff(WH) であることは \underline{X} が quasi-separated と同値
5. T が quasi-separated ならば $T(*)_{\text{top}}$ はコンパクト生成 weak Hausdorff(CGWH) となる.

注意 51.

$$F : \mathbf{Cond} \rightarrow \mathbf{T1Top} \quad T \rightarrow T(*)_{top}$$

$$G : \mathbf{T1Top} \rightarrow \mathbf{Cond} \quad X \rightarrow \underline{X} := \text{hom}(\cdot, X)$$

とおくと, G は F の右随伴射になる. この時点では fully faithfull などわからない.
しかしこれを制限した

$$F : \mathbf{qsCond} \rightarrow \mathbf{CGWHTop} \quad G : \mathbf{CGWHTop} \rightarrow \mathbf{qsCond}$$

についてその counit $\epsilon : FG \rightarrow I$ は同型射 $\epsilon_X : FG(X) = \underline{X}(*_{top}) \cong \underline{X}$ であるので, G は fully faithfull である. しかし essentially surjective と限らないので, 圏同値とは限らない.

5.4 [Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16](=定理 50) の証明で用いる事柄

定理 50 の証明において使う事柄をここで証明付きでまとめる.

5.4.1 Cond の monic 射, epi 射

補題 52. [Bar22, Theorem 4.11.2, 4.11.3, 4.11.4]

1. $f : T_1 \rightarrow T_2$ を κ -condensed set の射とする. $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ での f monic 射であることは任意の $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について $f(S) : T_1(S) \hookrightarrow T_2(S)$ が単射となることと同値.
2. $f : T_1 \rightarrow T_2$ を κ -condensed set の射とする. $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ での f epi 射であることは任意の $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について $f(S) : T_1(S) \twoheadrightarrow T_2(S)$ が全射となることと同値.
3. 上の 1, 2 は condensed set でも成り立つ.
4. 左 Kan 拡張 $\text{Lan}_K : \mathbf{Cond}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}$ について, $f : X \rightarrow Y$ が $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ での epi 射ならば $\text{Lan}_K(f) : \text{Lan}_K X \rightarrow \text{Lan}_K Y$ も epi.
5. 4 に関して $\text{Lan}_K : \mathbf{Cond}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\kappa'}$ でも成り立つ.

Proof. [1] の証明 f を monic(左簡約可能) とする. $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ とし, $s, t \in T_1(S)$ で $f(S)(s) = f(S)(t)$ とする. ($f(S) : T_1(S) \rightarrow T_2(S)$ である) すると米田より $s, t : \underline{S} \rightarrow T_1$ とみなせ, $f \circ s = f \circ t$ であるので, f が monic より $s = t$ となる.

逆に任意の $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について $f(S) : T_1(S) \hookrightarrow T_2(S)$ が単射とする. $s, t : T \rightarrow T_1$ かつ, $f \circ s = f \circ t$ ならば, 任意の $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について $s(S) = t(S)$ である. よって $s = t$ である (Sheaf で等しいと Presheaf で等しいは同じ. これは Sheafification の随伴性より)

[2] の証明 f を epi とする. $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ と $b \in T_2(S)$ について, $f(S)(c) = b$ なる c の存在を示す. sheaf の epi の定義からある有限個の $\{h_i : A_i \rightarrow S\}_{i=1}^n$ で $S = \cup f_i(A_i)$ となる被覆と $a_i \in T_1(A_i)$ があって,

$$T_2(h_i)(b) = f(A_i)(a_i)$$

となる. $A := A_1 \sqcup \cdots \sqcup A_n$, $h : h_1 \sqcup \cdots \sqcup h_n$, $a = (a_1, \dots, a_n) \in T_1(A)$, 開被覆を $\{h : A \rightarrow S\}$ とすると

$$T_2(h)(b) = f(A)(a)$$

となる. よって開被覆は初めから一つの場合に帰着できる.

すると $h : A \rightarrow S$ は全射かつ $S \in \mathbf{ED}$ から $g : S \rightarrow A$ で $h \circ g = id_S$ となる. よって $i = 1, 2$ で $T_i(g) \circ T_i(h) = id_{T_i(S)}$ である. よって以下の図式を得る.

$$\begin{array}{ccc} T_1(S) & \xrightarrow{f(S)} & T_2(S) \\ T_1(h) \downarrow & & \downarrow T_2(h) \\ T_1(A) & \xrightarrow{f(A)} & T_2(A) \\ T_1(g) \downarrow & & \downarrow T_2(g) \\ T_1(S) & \xrightarrow{f(S)} & T_2(S) \end{array}$$

これより

$$b = T_2(g)T_2(h)(b) = T_2(g)f(A)(a) = f(S)T_1(g)(a)$$

となり $c = T_1(g)(a)$ が欲しかったものである. 逆に関しては [1] と同様である.

[3] の証明 f monic ならば $f(S) : T_1(S) \rightarrow T_2(S)$ が単射は同じ証明が回る. 逆も $s, t : T \rightarrow T_1$ を考えると, κ を止めた $\mathbf{Cond}_{<\kappa}$ で考えられることと $\mathbf{Cond}_{<\kappa} \subset \mathbf{Cond}$ からわかる.

$f : T_1 \rightarrow T_2$ が epi とする. すると $T_i = Lan_K T_{i,\kappa}$ と $f_\kappa : T_{1,\kappa} \rightarrow T_{2,\kappa}$ で $f = Lan_K(f_\kappa)$ となるものがある. $Lan_K : \mathbf{Cond}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}$ は fully faithful なので f_κ も epi となる. よって代入して全射が言える. 逆は presheaf の同型が Sheaf の同型になるので良い.

[4] の証明 $f_\kappa : T_{1,\kappa} \rightarrow T_{2,\kappa}$ で epi とすると $\tilde{S} \in \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}$ について

$$Lan_K(f_\kappa)(\tilde{S}) : Lan_K T_{1,\kappa}(\tilde{S}) = \text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S, |S| < \kappa} T_{1,\kappa}(S) \rightarrow Lan_K T_{2,\kappa}(\tilde{S}) = \text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S, |S| < \kappa} T_{2,\kappa}(S)$$

である. 今 f_κ epic より $T_{1,\kappa}(S) \rightarrow T_{2,\kappa}(S)$ は全射である. よって $Lan_K(f_\kappa)(\tilde{S})$ 全射である. [3] から epi である.

[5] の証明 [4] に同じ. □

5.4.2 Cond の直積

33 の有限直積の場合だけよく使うのでここにまとめておく.

補題 53. [Bar22, Lemma 3.6.2] $f : S \rightarrow W$, $g : T \rightarrow W$ を condensed set の射とする. この時 $U \in \mathbf{Set}^{\mathbf{ED}^{op}}$ を

$$U(X) := S(X) \times_{W(X)} T(X)$$

とおくと 33 より U は condensed set となる.

このとき

$$U(*)_{top} \rightarrow S(*) \times_{W(*)} T(*)$$

となる連続な全単射が存在する.

さらに f, g が epi 射であるとき直積の図式

$$\begin{array}{ccc} U & \xrightarrow{q} & T \\ p \downarrow & & \downarrow g \\ S & \xrightarrow{f} & W \end{array}$$

について W は $p : U \rightarrow S, q : U \rightarrow T$ の pushout になる.

Proof. 前半の主張に関して [33](#) により連続写像 $f(*) : S(*) \rightarrow W(*)$ $g(*) : T(*) \rightarrow W(*)$ についてその直積は

$$X = \{(s, t) \in S(*) \times T(*) \mid f(*) (s) = g(*) (t)\}$$

で与えられる. 今 $p : U \rightarrow S, q : U \rightarrow T$ とすると, $p(*) : U(*) \rightarrow S(*), q(*) : U(*) \rightarrow T(*)$ なる連続写像で $f(*) \circ p(*) = g(*) \circ q(*)$ であるので

$$h : U(*)_{top} \rightarrow X$$

となる連続写像が与えられる. これは集合としては全単射である.

後半の主張に関して Presheaf としての $p : U \rightarrow S, q : U \rightarrow T$ の pushout を $S \sqcup_U T$ とする. これが W と同型であることを示す. $S \sqcup_U T$ とは $X \in \mathbf{ED}$ について

$$(S \sqcup_U T)(X) = S(X) \sqcup T(X) / \sim$$

である. ここで同値関係 \sim は $S(X) \times_{U(X)} T(X)$ で生成される同値関係である. もっと詳しく言うと

- $(x, 1) \sim (y, 2)$ は $x = p(X)(s, t) = s, y = q(X)(s, t) = t$ となる $(s, t) \in S(X) \times_{W(X)} T(X)$ が存在すること. つまり $g(X)(y) = f(X)(x)$ となること.
- $(x, 1) \sim (x', 1)$ は $f(X)(x) = g(X)(y) = f(X)(x')$ なる $y \in T(X)$ が存在すること.
- $(y, 2) \sim (y', 2)$ は $g(X)(y) = f(X)(x) = g(X)(y')$ なる $x \in S(X)$ が存在すること.

とする. これは f, g が epi 射なので well-defined である. 今

$$\pi(X) : S(X) \sqcup T(X) / \sim \rightarrow W \quad \pi : (x, 1) \mapsto f(x) \quad \pi(y, 2) \mapsto g(y)$$

とすると $\pi(X)$ は well-defined で X について自然である. よって $\pi(X)$ が全単射であることを示せば良いがこれは同値関係のわりかたからすぐわかる.

よって Presheaf として $W \cong S \sqcup_U T$ である. これの sheafification したものが sheaf としての余極限だったので sheaf としても $W \cong S \sqcup_U T$ である. \square

補題 54. [Bar22, Lemma 3.6.2] Condensed set の epi 射は pullback で保たれる

Proof. 33 から Condensed set の直積は Presheaf としての直積である. よって 52 より $X \in \mathbf{ED}$ を代入して全射であることを見れば良くこれは明らかである. \square

5.4.3 qc

定理 55. [Bar22, Proposition 4.11.11] condensed set T について 以下は同値.

1. T が qc
2. $X \in \mathbf{ED}$ があって $\underline{X} \rightarrow T$ なる epi 射が存在する
3. $X \in \mathbf{CHaus}$ があって $\underline{X} \rightarrow T$ なる epi 射が存在する

Proof. (1) \Rightarrow (2) で $T \in \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ の場合 T は $\mathit{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(\cdot, X)$ の余極限でかける. (23 参照). つまり

$$T \cong \mathit{colim}_{(X,x) \in \mathit{Ob}(1 \downarrow T)} \mathit{hom}(\cdot, X)$$

であった. colimit は coproduct の coequalizer であったので $\sqcup_{i \in I} \underline{X}_i \twoheadrightarrow T$ となる小さな添字圏 I が存在する.(85 参照) よって T は qc であるので

$$\sqcup_{i=1}^n \underline{X}_i \twoheadrightarrow T$$

がいえる. よってあとは

$$\sqcup_{i=1}^n \underline{X}_i \cong \underline{\sqcup_{i=1}^n X_i}$$

が言えれば良い. これには 2 つの示し方がある.

[1] 米田を使う方法. これは任意の Condensed set F について自然な同型

$$\begin{aligned} \mathit{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\kappa}}(\underline{X_1 \sqcup X_2}, F) &\cong F(X_1 \sqcup X_2) \\ &\cong F(X_1) \times F(X_2) \\ &\cong \mathit{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\kappa}}(\underline{X_1}, F) \times \mathit{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\kappa}}(\underline{X_2}, F) \\ &\cong \mathit{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\kappa}}(\underline{X_1 \sqcup X_2}, F) \end{aligned}$$

が存在するため米田の補題の系 (84 参照) から同型が言える.

[2] 地道に示す方法. $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について,

$$\mathit{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(S, X_1) \sqcup \mathit{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(S, X_2) \twoheadrightarrow \mathit{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(S, X_1 \sqcup X_2)$$

が存在する. 単射性は明らか. 全射性は $f \in \mathit{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(S, X_1 \sqcup X_2)$ について $S_1 := \beta(f^{-1}(X_1)_{dist})$, $S_2 := \beta(f^{-1}(X_2)_{dist})$ とすると $\{S_i \rightarrow S\}_{i=1,2}$ が covering となり $f|_{S_1}$ は X_1 を経由する. $f|_{S_2}$ も X_2 を経由するので全射性が言える.

(1) \Rightarrow (2) で一般の場合 $T = \text{Lan}_K T_\kappa$ となる T_κ をとる. すると $\underline{X} \rightarrow T_\kappa$ が存在する. 52(4) より左 Kan 拡張を取っても epi 性は保たれる. ¹⁵

(2) \Rightarrow (1) かつ $T = \underline{X}$ の場合 epi 射 $f : \sqcup T_i \rightarrow \underline{X}$ とする. $\sqcup T_i$ の構成は presheaf としての余極限 $\sqcup_{Psh} T_i$ の sheafification $(\sqcup_{Psh} T_i)^\sharp$ であった. よって

$$f(X) : (\sqcup T_i)(X) = (\sqcup_{Psh} T_i)^\sharp(X) \rightarrow \underline{X}(X) = \text{hom}_{\mathbf{ED}}(X, X)$$

は全射である. つまり $id_X \in \text{hom}_{\mathbf{ED}}(X, X)$ についてある $s \in (\sqcup T_i)(X)$ があって, $f(X)(s)$ となる. よって 35 からある covering $\{h_k : X_k \rightarrow X\}_{k=1}^n$ と $s_k \in (\sqcup_{Psh} T_i)(X_k)$ があって

$$\sharp(X_k)(s_k) = s|_{X_k}$$

となる. $s_k \in (\sqcup_{Psh} T_i)(X_k) = \sqcup_{set} T_i(X_k)$ であるので, 集合の直和の定義から, ある i_k があって $s_k \in T_{i_k}(X_k)$ となる.

$$\begin{array}{ccc} T_{i_k}(X) & \xrightarrow{f_{i_k}(X)} & \underline{X}(X) \\ T_{i_k}(h_k) \downarrow & & \downarrow h_k \\ T_{i_k}(X_k) & \xrightarrow{f_{i_k}(X_k)} & \underline{X}(X_k) \end{array}$$

という図式から $h_k = f_{i_k}(X_k)(s_k)$ であることがわかる.

そこで

$$\tilde{f} := \sqcup f_i : \tilde{T} := \sqcup_{k=1}^n T_{i_k} \rightarrow \underline{X}$$

を考える. \tilde{T} は Presheaf としての直和を sheafification したものである. これが sheaf の全射であることを示せば良い.

$S \in \mathbf{ED}$ と $g \in \underline{X}(S) = \text{hom}_{\mathbf{ED}}(S, X)$ をとる¹⁶ S_k を $\beta((X_k \times_X S)_{dist})$ とすると $S_k \rightarrow S$ を得る. ある $c_k \in \tilde{T}(S_k)$ で $\tilde{f}(S_k)(c_k) = g|_{S_k}$ となるものが存在することを示す.

今図式としては下の様になっている.

$$\begin{array}{ccc} S & \xrightarrow{g} & X \\ b_k \uparrow & & \uparrow h_k \\ S_k & \xrightarrow{a_k} & X_k \end{array} \qquad \begin{array}{ccc} \underline{X}(X_k) & \xrightarrow{\circ a_k} & \underline{X}(S_k) \\ f_{i_k}(X_k) \uparrow & & \uparrow f_{i_k}(S_k) \\ T_{i_k}(X_k) & \xrightarrow{T_{i_k}(a_k)} & T_{i_k}(S_k) \end{array}$$

よって $d_k = (T_{i_k}(a_k))(s_k) \in T_{i_k}(S_k)$ おくと

$$g|_{S_k} = g \circ b_k = h_k \circ a_k = (\circ a_k)(f_{i_k}(X_k))(s_k) = (f_{i_k}(S_k))(T_{i_k}(a_k))(s_k) = (f_{i_k}(S_k))(d_k)$$

である. $\sharp : T_k \rightarrow \sqcup_{Psh} T_k \rightarrow \tilde{T}$ ¹⁷ であるので, $c_k := \sharp(S_k)(d_k)$ とおくと $g|_{S_k} = \tilde{f}(S_k)(c_k)$ となる.

(2) \Rightarrow (1) 一般の場合 $\{T_i \rightarrow T\}_{i \in I}$ かつ epi 射 $\sqcup T_i \rightarrow T$ とする. $X_i := T_i \times_T X$ おく. presheaf

¹⁵ $\text{Lan}_K \underline{X} = \underline{X}$ は 50(1) より. ここには qc 性は使われていないので循環論法にはなっていない

¹⁶ 必要ならば強極限基数を止めれば良い.

¹⁷ $\sqcup_{Psh} T_k$ は Presheaf としての余積

として

$$\begin{array}{ccc} \sqcup_{Psh} X_i & \longrightarrow & \underline{X} \\ \downarrow & & \downarrow \\ \sqcup_{Psh} T_i & \longrightarrow & T \end{array}$$

は直積となっている。これは各々 $E \in \mathbf{ED}$ を代入すればわかる。sheafification は有限 \lim と交換するので、

$$\begin{array}{ccc} \sqcup X_i = (\sqcup_{Psh} X_i)^\# & \longrightarrow & \underline{X} \\ \downarrow & & \downarrow \\ \sqcup T_i = (\sqcup_{Psh} T_i)^\# & \longrightarrow & T \end{array}$$

も直積となる。 $\sqcup T_i \rightarrow T$ は epi 射なので 54 より $\sqcup X_i \rightarrow \underline{X}$ も epi 射である。よって \underline{X} は qc なので $\sqcup_{k=1}^l X_{i_k} \rightarrow \underline{X}$ が epi 射になる。よって $\sqcup_{k=1}^l T_{i_k} \rightarrow T$ も epi 射になる。これは各々 $E \in \mathbf{ED}$ を代入して集合の全射を見れば良いからである (54 参照。) \square

定理 56. [Bar22, Proposition 4.12.3] X をコンパクトハウスドルフ, T を condensed set とする。 T が qc で $f : T \hookrightarrow \underline{X}$ なる monic 射があるならば, $T \cong \underline{Z}$ となる閉集合 $Z \subset X$ が存在する。

Proof. T が qc なので $\pi : \underline{E} \rightarrow T$ なる \mathbf{ED} がある。そこで $Z := f(*) \circ \pi(*) (E) \subset X$ とおく。 Z は閉集合である。

すると $\tilde{f} : T \rightarrow \underline{Z}$ が f から誘導される。 $S \in \mathbf{ED}$, $h \in T(S)$ について $\pi(\tilde{h}) = h$ を取って

$$\tilde{f}(h) := f(S) \circ \pi(S)(\tilde{h})$$

とする。これは f が monic なので $f(S)$ が単射となることから \tilde{h} の取り方によらない。また \tilde{f} が自然であり, sheaf の射になることもわかる。 $i : \underline{Z} \rightarrow \underline{X}$ を包含写像とすると $i \circ \tilde{f} = f$ であるこれより次の図式を得る

$$\underline{E} \xrightarrow{\pi} T \xrightarrow{\tilde{f}} \underline{Z} \xrightarrow{i} \underline{X}$$

\tilde{f} が epi かつ monic を示せば良い。

monic 性 $\tilde{f}(S)(g_1) = \tilde{f}(S)(g_2)$ ならば $i(S)$ をかまして $f(S)(g_1) = f(S)(g_2)$ を得る。 $f(S)$ は単射なので $g_1 = g_2$ となる。

epi 性 $S \in \mathbf{ED}$, $k \in \underline{Z}(S) = \text{hom}_{\mathbf{Top}}(S, Z)$ とする。 $f(*) \circ \pi(*) : E \rightarrow \underline{Z}$ 全射なので, $S \in \mathbf{ED}$ から $E \rightarrow S \xrightarrow{k} \underline{Z}$ と分解する。よってこの $E \rightarrow S$ を $T(S)$ に送ったものが全射性を与える。 \square

5.4.4 qs

定理 57. [Bar22, Proposition 4.11.12] condensed set T について次は同値.

1. T が qs.
2. $X_1, X_2 \in \mathbf{ED}$ について $\underline{X}_i \rightarrow T$ ならば $\underline{X}_1 \times_T \underline{X}_2 \cong \underline{L}$ となる $L \subset X_1 \times X_2$ 閉集合が存在する.
3. $X_1, X_2 \in \mathbf{ED}$ について $\underline{X}_i \rightarrow T$ ならば $\underline{X}_1 \times_T \underline{X}_2$ は qc.

Proof. (1) から (3) は明らか. (3) から (1) について $S_1 \rightarrow T, S_2 \rightarrow T$ qc とすると 55 から $X_1, X_2 \in \mathbf{ED}$ と epi 射 $\underline{X}_i \rightarrow S_i$ が存在する. よって $\underline{X}_1 \times_T \underline{X}_2 \rightarrow S_1 \times_T S_2$ を得るが, 54 と 52(2) よりこれは epi 射になる. (各々 $S \in \mathbf{ED}$ を代入して全射であることを示せば良い. がこれは直積が明示的に作れているので明らか.) よって (2) の条件と 55 から $W \in \mathbf{ED}$ と epi 射 $\underline{W} \rightarrow S_1 \times_T S_2$ が作れて qc となる.

(2) から (3) は 55 より. (3) から (2) について包含写像 $i: \underline{X}_1 \times_T \underline{X}_2 \hookrightarrow \underline{X}_1 \times \underline{X}_2 = \underline{X}_1 \times \underline{X}_2$ について, 56 を適応すれば良い. \square

補題 58. condensed set の monic 射 $f: S \hookrightarrow T$ について, T が qs ならば S も qs.

Proof. $S_1 \rightarrow S, S_2 \rightarrow S$ について

$$S_1 \times_S S_2 \cong S_1 \times_T S_2$$

であることが 33 からわかるため, 欲しい結果が得られる. \square

5.4.5 コンパクトハウスドルフ空間

補題 59. X コンパクトハウスドルフ空間 \sim を同値関係とし $L = \{(x, y) | x \sim y\}$ とする. $L \subset X \times X$ が閉集合ならば X/\sim はコンパクトハウスドルフである

Proof. X/\sim がハウスドルフであることを示せば良い. $\tilde{x}, \tilde{y} \in X/\sim$ で $\tilde{x} \neq \tilde{y}$ とする. $\pi(x) = \tilde{x}, \pi(y) = \tilde{y}$ とすると $x \not\sim y$ である. よって $(x, y) \notin R$ より R は閉集合であるので, $x \in U_x, y \in U_y$ で $U_x \times U_y \subset X \times X \setminus R$ と取れる. これより $\pi(U_x)$ と $\pi(U_y)$ が \tilde{x} と \tilde{y} を分離する開集合を与える. \square

補題 60. I small cofiltered category. ^a $F: I \rightarrow \mathbf{Chaus}$ 関手に関して $\lim_I F(i)$ が空ならば, ある $i \in I$ があって $F(i)$ も空である

^acofiltered とは filtered category の opposite 版である. filtered category は cocone を持ち colim に対応, cofiltered category は cone を持ち lim に対応する.

Proof. 対偶を示す. 任意の $i \in I$ について $x_i \in F(i)$ をとる. $i \in I$ について

$$L_i := \{(z_i)_{i \in I} \in \prod_{i \in I} F(i) \mid h : i \rightarrow k \text{ について } F(h)(z_i) = x_k\}$$

すると L_i は closed であり, 有限交差性を持つ. なぜなら i_1, \dots, i_k について cofiltered からある j があって $j \rightarrow i_1, j \rightarrow i_2, \dots, j \rightarrow i_k$ となるものがあるため. よってチコノフの定理より $\prod_{j \in I} F(i)$ はコンパクトなので $\bigcap_{i \in I} L_i$ は空ではない. そしてその元は $\lim_I F(i)$ の元でもある. \square

5.4.6 弱ハウスドルフ空間 (WH)

補題 61. [Str, Lemma 1.3] X を WH とする W compact Hausdorff で $\phi : W \rightarrow X$ 連続のとき $\phi(W)$ はコンパクトハウスドルフ

Proof. $\phi(W)$ がハウスドルフを示せば良い. $x, y \in \phi(W)$ かつ $x \neq y$ とする. コンパクトハウスドルフ空間は T_4 なので

$$\phi^{-1}(x) \subset U \quad \phi^{-1}(y) \subset V \quad U \subset V = \emptyset$$

となる W の開集合 U, V が取れる. $\phi(U^c)$ は閉集合で $(\phi(W) \setminus \phi(U^c)) \cap (\phi(W) \setminus \phi(V^c)) = \emptyset$ であり

$$x \in (\phi(W) \setminus \phi(U^c)) \quad y \in (\phi(W) \setminus \phi(V^c))$$

であるので上の二つの開集合が x, y を分離する. \square

補題 62. [Str, Lemma 3.3]

I small filtered category とし関手 $X : I \rightarrow \mathbf{CGWH}$ とする. さらに $f : i \rightarrow j$ について $Xf : X_i \rightarrow X_j$ は連続な単射で $Xf(X_i) \subset X_j$ は X_j で閉集合であるとする.

この時 $\text{colim}_{i \in I} X_i$ は CGWH

証明は非常に長くなるので Appendix A.2.3 にまとめておいた.

5.5 [Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16](=定理 50) (1) と (2) の証明

Proof of Theorem 50 (1). X を T_1 空間とする. $|X| < cf(\kappa) \leq \kappa$ となる強極限基数を固定する.(これは 10 より存在する.) $\underline{X} = \text{hom}_{\mathbf{ED}}(\cdot, X)$ が Condensed set になることを示せば良い. つまり任意の $\kappa < \tilde{\kappa}$ となる強極限基数と $\tilde{S} \in \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}$ について

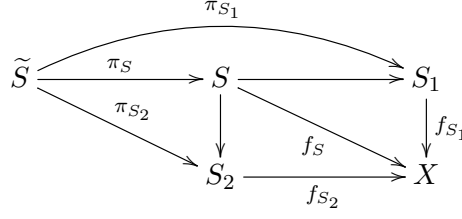
$$\underline{X}(\tilde{S}) = \text{hom}_{\mathbf{ED}}(\tilde{S}, X) \cong \text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S, |S| < \kappa} \text{hom}_{\mathbf{ED}}(S, X)$$

を示せば良い.

集合の余極限の定義から

$$\text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}} \text{hom}(S, X) = \{(f_S, S) : f_S : S \rightarrow X, \pi_S : \tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}\} / \sim$$

である. $\{(f_S, S) : f_S : S \rightarrow X, \pi_S : \tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}\}$ は命題 28 により $cf(\kappa)$ -filtered category になる. ここで $(f_{S_1}, S_1) \sim (f_{S_2}, S_2)$ とはある $f_S : S \rightarrow X, \pi_S : \tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ があって, 次が可換になることとなる.



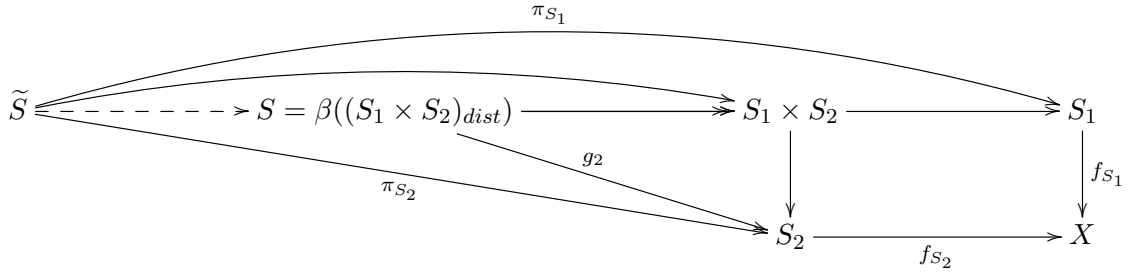
自然な写像

$$\Phi : \text{colim}_{\tilde{S} \rightarrow S, |S| < \kappa} \text{hom}(S, X) \rightarrow \text{hom}(\tilde{S}, X) \quad \Phi(f_S, S) := f_S \circ \pi_S \in \text{hom}(\tilde{S}, X) \quad (3)$$

が存在し \sim の取り方によらず well defined である. これが全単射であることを示す.

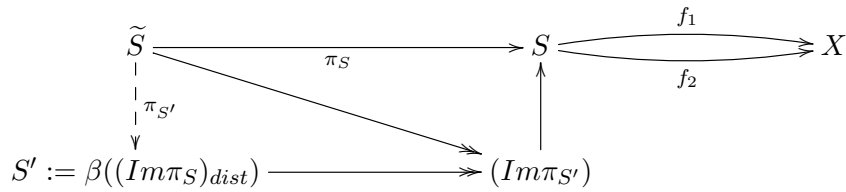
[1] Φ は単射 (ここに T_1 は必要なし)

$\Phi(f_{S_1}, S_1) = \Phi(f_{S_2}, S_2)$ とする. まず $S = S_1 = S_2$ として良いことを示す. これは $S = \beta((S_1 \times S_2)_{dist})$ とすると次の図式を得る



$\tilde{S} \in \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}$ であったので, $\tilde{S} \rightarrow S$ を誘導する. $(S_2, f_2) \sim (S, g_2)$ であるので $S = S_1 = S_2$ として良い.

$f_i := f_{S_i}, \pi = \pi_{S_i}$ とかき $\Phi(f_1, S) = \Phi(f_2, S)$ とする. つまり $f_1 \circ \pi = f_2 \circ \pi : \tilde{S} \rightarrow X$ とする. $S' := \beta((\text{Im} \pi_{S'})_{dist})$ とおくと次の図式を得る.



$\tilde{S} \in \mathbf{ED}_{<\tilde{\kappa}}$ であったので, $\pi_{S'} : \tilde{S} \rightarrow S'$ を誘導する. そこで $h : S' \rightarrow S$ とすると $(f_1, S) \sim (f_1 \circ h, S')$ かつ $(f_2, S) \sim (f_2 \circ h, S')$ となる. あとは $f_1 \circ h = f_2 \circ h$ を示せば良いが, これは $\text{Im} \pi_S$ を経由するため明らかである.

[2] Φ は全射 (ここに T_1 が必要)

以下 $f : \tilde{S} \rightarrow X$ とする. 段階を分けて証明する.

[2-1] $x, y \in X$ かつ $x \neq y$ ならば, ある $S_{x,y} \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ と $\tilde{S} \rightarrow S_{x,y}$ が存在して

$$F_{x,y} : \tilde{S} \times_{S_{x,y}} \tilde{S} \longrightarrow \tilde{S} \times_{S_{x,y}} \tilde{S} \xrightarrow{f \times f} X \times X$$

について $(x, y) \notin \text{Im} F_{x,y}$ となることを示す.

まず $(f_S, S) \in \{(f_S, S) : f_S : S \rightarrow X, \pi_S : \tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_\kappa\}$ について

$$\lim_{(f_S, S) : f_S : S \rightarrow X, \pi_S : \tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_\kappa} \tilde{S} \times_S \tilde{S} \cong \tilde{S}$$

である. なぜならば

$$\tilde{S} \times_S \tilde{S} = \{(z, w) \in \tilde{S} \times \tilde{S} \mid \pi_S(z) = \pi_S(w)\} \subset \tilde{S} \times \tilde{S}$$

であるので,

$$\lim_{(f_S, S) : f_S : S \rightarrow X, \pi_S : \tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_\kappa} \tilde{S} \times_S \tilde{S} = \bigcup_{(f_S, S) : f_S : S \rightarrow X, \pi_S : \tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_\kappa} \tilde{S} \times_S \tilde{S} \subset \tilde{S} \times \tilde{S}$$

となる. そこで $\tilde{S} \rightarrow \lim \tilde{S} \times_S \tilde{S}$ を $x \mapsto (x, x)$ として定義する. これは全単射である.

- 単射性は $\tilde{S} \times \tilde{S}$ の中の元なので明らか.
- 全射性に関しては, $(z, w) \in \lim_{(f_S, S) : f_S : S \rightarrow X, \pi_S : \tilde{S} \rightarrow S, S \in \mathbf{ED}_\kappa} \tilde{S} \times_S \tilde{S}$ ととる. もし $z \neq w$ ならば, \tilde{S} は profinite set なので $\tilde{S} = \lim F_l$ と discrete set の極限としてかけることより, ある $\phi : \tilde{S} \rightarrow F$ があって $\phi(z) \neq \phi(w)$ となる. よって $(z, w) \notin \tilde{S} \times_F \tilde{S}$ となり矛盾. よって $z = w$ とかける.

以上より $\tilde{S} \cong \lim \tilde{S} \times_S \tilde{S}$ である.

さて,

$$F_S : \tilde{S} \times_S \tilde{S} \rightarrow \tilde{S} \times \tilde{S} \rightarrow X \times X \quad (z, w) \rightarrow (f(z), f(w))$$

とおく. X が T_1 なので (x, y) は closed. よって $F_S^{-1}(x, y)$ も $\tilde{S} \times \tilde{S}$ 内で closed なのでコンパクトハウスドルフである. $\lim_{\tilde{S} \rightarrow S} \tilde{S} \times_S \tilde{S} \cong \tilde{S}$ により

$$\lim_{\tilde{S} \rightarrow S} F_S^{-1}(x, y) = \emptyset$$

である. よって補題 60 よりある S があって $F_S^{-1}(x, y)$ も空集合になる.

以上より $S_{x,y} := S$ とおくと, $F_{S_{x,y}}^{-1}(x, y)$ が空のため, $(x, y) \notin \text{Im}(F_{S_{x,y}})$ である.

[2-2] ある $S_0 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ があって

$$\tilde{S} \times_{S_0} \tilde{S} \xrightarrow[p_2]{p_1} \tilde{S} \xrightarrow{f} X$$

とするとき $f \circ p_1 = f \circ p_2$ となることを示す. ここで p_i は第 i 射影となる.

S_0 を $\prod_{(x,y) \in X \times X, x \neq y} S_{x,y}$ に離散位相を入れた Stone Cech コンパクト化とする. すると $|S_0| < \kappa$ である. なぜならば $|X \times X| \leq |X| < cf(\kappa)$ であるので, $\mu := \sup |S_{x,y}| < \kappa$ である.¹⁸ よって命

¹⁸もし $\sup |S_{x,y}| \geq \kappa$ ならば, $X \times X \rightarrow \kappa$ を $(x, y) \mapsto |S_{x,y}|$ と定義すれば共終部分集合が取れてしまい正則性に矛盾

題 9 から

$$\prod_{(x,y) \in X \times X, X \neq y} S_{x,y} \leq \mu^{|X \times X|} \leq \mu^{|X|} \leq (2^\mu)^{|X|} = 2^{\mu|X|} = 2^{\max\{\mu, |X|\}} < \kappa$$

である. よって $S_0 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ である.

$S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ であるので $\pi_{S_0} : S \rightarrow S_0$ が誘導される. これが欲しいものであることを示す. それには「 $\pi_S(z) = \pi_S(w)$ ならば $f(z) = f(w)$ 」を示せば良い.

もし $\pi_S(z) = \pi_S(w)$ かつ $f(z) \neq f(w)$ なる元があったとする. すると $x = f(z), y = f(w)$ とおけば以下の図式が可換になる.

$$\begin{array}{ccc} \tilde{S} \times_{S_0} \tilde{S} & \xrightarrow{f \times f} & X \times X \\ \cap & & \parallel \\ \tilde{S} \times_{S_{x,y}} \tilde{S} & \xrightarrow{F_{x,y}} & X \times X \end{array}$$

これは [2-1] の $(x, y) \notin \text{Im} F_{x,y}$ であったことに矛盾する.

[2-3] 結論 状況としては, $f : \tilde{S} \rightarrow X$ について, ある $S_0 \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ があって

$$\begin{array}{ccc} \tilde{S} & \xrightarrow{f} & X \\ \downarrow \pi_{S_0} & \searrow f_{S_0} & \\ S_0 & & \end{array}$$

となる. [2-2] から $\pi_{S_0}(z) = \pi_{S_0}(w)$ ならば $f(z) = f(w)$ が言えている. よって商写像の性質から $f_{S_0} : S_0 \rightarrow X$ を誘導する. よって $f = f_{S_0} \circ \pi_{S_0} = \Phi(f_{S_0}, S_0)$ あり全射性が言えた.

[3] X が T_1 になること. qc condensed set $S \rightarrow X$ と $* \rightarrow X$ について $S \times_X *$ が qc であることを示す.

[3-1] $Y \in \mathbf{ED}$ で $S = \underline{Y}$ となる場合 適宜基数を取り替えて $Y \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ として良い. $x : * \rightarrow X = \text{hom}_{\mathbf{ED}}(\cdot, X)$ とする. $\text{hom}_{\mathbf{Cond}}(*, X) \cong \underline{X}(\cdot) = X$ であることに注意すれば, これは $x \in X$ をとることに対応する.

$Q = Y \times_X \{x\}$ とすると次の図式を得る.

$$\begin{array}{ccc} Q = Y \times_X \{x\} & \longrightarrow & \{x\} \\ \downarrow & & \downarrow \\ Y & \xrightarrow{f} & X \end{array}$$

X は T_1 なので, $\{x\}$ は閉集合であり. $Q = Y \times_X \{x\} = f^{-1}(x) \subset Y$ は閉集合である. よって Q はコンパクトハウスドルフである. $G : X \mapsto \underline{X} = \text{hom}(\cdot, X)$ は $\mathbf{Top}_{<\kappa} \rightarrow \mathbf{Cond}_{<\kappa}$ への右随伴射であるので, 直積を交換する. よって $Q = \underline{Y} \times_{\underline{X}} *$ であり, 55 から qc となる.

[3-2] S が一般の場合. S が qc ならば, 55 よりある $Y \in \mathbf{ED}$ からの epi 射 $\underline{Y} \twoheadrightarrow S$ が存在する.

よって

$$\begin{array}{ccccc} \underline{Y} \times_{\underline{X}} * & \longrightarrow & S \times_{\underline{X}} * & \longrightarrow & * \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\ \underline{Y} & \longrightarrow & S & \longrightarrow & \underline{X} \end{array}$$

という図式が存在する. 補題 54 から $\underline{Y} \times_{\underline{X}} * \rightarrow S \times_{\underline{X}} *$ は epi 射であるので, 55 により $S \times_{\underline{X}} *$ も qc となる. \square

Proof of Theorem 50 (2). T を T_1 condensed set とする. $T(*)_{top}$ が T_1 空間であることを示す. $x \in T(*)_{top}$ をとり $\{x\}$ が閉集合であることを示せば良い. $T(*)_{top}$ の位相の定義から, ある強極限基数 κ があって任意の $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ と $f \in T(S) = \mathit{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\kappa}}(\underline{S}, T)$ について $f(*)^{-1}(x)$ が S 上で閉であることを示せば良い.

Condensed set の圏に small limit は存在するので, $x : * \rightarrow T$ とみなし, $U = \underline{S} \times_T *$ とする.

$$\begin{array}{ccc} U = \underline{S} \times_T * & \longrightarrow & * \\ \downarrow & & \downarrow x \\ \underline{S} & \xrightarrow{f} & T \end{array}$$

T は T_1 なので, U は qc である. 55 より $W \in \mathbf{ED}$ と epi 射 $\underline{W} \rightarrow U$ が存在する. よって 54 から

$$W = \underline{W}(*_{top}) \rightarrow U(*_{top}) \rightarrow S \times_{T(*_{top})} * = f(*)^{-1}(x)$$

となる連続な全射が存在する. W コンパクトより $f^{-1}(x)$ もコンパクト. S はコンパクトハウスドルフより $f(*)^{-1}(x)$ は閉集合である. \square

5.6 [Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16](=定理 50)(3) の証明

Proof of Theorem 50 (3). [1] (a) の証明 X をコンパクトハウスドルフとする. \underline{X} は 55 から qc である. また $Y_i \in \mathbf{ED}$ について $^{19}\underline{Y}_i \rightarrow \underline{X}$ とすると $G : X \mapsto \underline{X}$ は右随伴射なので limit を保つので

$$\underline{Y}_1 \times_{\underline{X}} \underline{Y}_2 \cong \underline{Y}_1 \times_{X_1} Y_2$$

であり $Y_1 \times_{X_1} Y_2$ はコンパクトハウスドルフより $\underline{Y}_1 \times_{\underline{X}} \underline{Y}_2$ は qc である. よって 57 から qs である.

[2] (b) の証明示すことは $G : \mathbf{CHaus} \rightarrow \mathbf{qcqsCond}$, $X \rightarrow \underline{X}$ と $X, Y \in \mathbf{CHaus}$ について

$$\mathit{hom}_{\mathbf{CHaus}}(X, Y) \cong \mathit{hom}_{\mathbf{qcqsCond}}(\underline{X}, \underline{Y})$$

が全単射であることである. これは $X, Y \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ を止めれば

$$\mathit{hom}_{\mathbf{CHaus}}(X, Y) \cong \mathit{hom}_{\mathbf{CHaus}_{<\kappa}}(X, Y) \cong \mathit{hom}_{\mathbf{Cond}_{<\kappa}}(\underline{X}, \underline{Y}) \cong \mathit{hom}_{\mathbf{Cond}}(\underline{X}, \underline{Y})$$

¹⁹適宜基数 κ を止めて考える. 以下同様.

よりわかる. ²⁰

[3] (c) の証明 G が essentially surjective を示す.

T は qc なので $X \in \mathbf{ED}$ で epi 射 $f: \underline{X} \rightarrow T$ がある. そして T は qs なので ⁵⁷ により $\underline{X} \times_T \underline{X} \cong L$ となる閉集合 $L \subset X \times X$ が存在する.

これより位相空間の同型

$$L \cong X(*) \times_{T(*)_{top}} X(*) = \{(x, y) \in X \times X \mid f(*) (x) = f(*) (y)\} \subset X \times X$$

が存在する. これは ⁵⁴ より $L \rightarrow X(*) \times_{T(*)} X(*)$ は連続な全単射で, コンパクト空間からハウスドルフ空間の連続写像は閉写像なので, 同相になる. $X(*) \times_{T(*)} X(*)$ はコンパクトなので $X \times X$ の中で閉集合である. 以下 $L = \{(x, y) \in X \times X \mid f(*) (x) = f(*) (y)\}$ とみなす.

X に同値関係を

$$x \sim y \Leftrightarrow (x, y) \in L$$

として入れる. L の上の表示から同値関係になる. L は閉集合なので ⁵⁹ から X/\sim はコンパクトハウスドルフである.

よって次の二つの図式を得る.

$$\begin{array}{ccc} L & \xrightarrow{p_2} & X \\ \downarrow p_1 & & \downarrow \pi \\ X & \xrightarrow{\pi} & X/\sim \end{array} \qquad \begin{array}{ccc} \underline{L} & \xrightarrow{\underline{p}_2} & \underline{X} \\ \downarrow \underline{p}_1 & & \downarrow f \\ \underline{X} & \xrightarrow{f} & T \end{array}$$

左の図式は pushout である. 右の図式は ⁵⁴ から直積でもあり pushout でもある. よって $\underline{p}_1, \underline{p}_2: \underline{L} \rightarrow \underline{X}$ の pushout が X/\sim であることを示せば良い. ²¹

まず Presheaf として $\underline{p}_1, \underline{p}_2: \underline{L} \rightarrow \underline{X}$ の pushout V が X/\sim であることを示す. これは $S \in \mathbf{ED}$ について

$$V(S) = \text{hom}(S, \underline{X}) \sqcup \text{hom}(S, \underline{X})/\sim$$

$(h_1, 1) \sim (h_2, 2)$ は $h \in \text{hom}(S, L)$ で $h_i = p_i \circ h$ となるものが存在することと同値とする. ²² $h = (h_1, h_2)$ とかけるので任意の $s \in S$ について $f(*) (h_1(s)) = f(*) (h_2(s))$ となることと同値である.

$$V(S) \rightarrow \text{hom}(S, X/\sim) \quad (h_1, 1) \mapsto \pi \circ h_1 \quad (h_2, 2) \mapsto \pi \circ h_2$$

とすると, これは Well-defined である. 全射性は $S \in \mathbf{ED}$ より, 単射性は $\pi \circ h_1 = \pi \circ h_2$ ならば $s \in S$ について $f(*) (h_1(s)) = f(*) (h_2(s))$ となるのでわかる.

以上より Presheaf として $\underline{p}_1, \underline{p}_2: \underline{L} \rightarrow \underline{X}$ の pushout は X/\sim である. それを sheafification したものが $\underline{p}_1, \underline{p}_2: \underline{L} \rightarrow \underline{X}$ の sheaf としての pushout であったので, X/\sim がそれに当たる.

以上より pushout は唯一なので $T \cong X/\sim$ を得る. (ちなみに canonical な写像は $f(*): X/\sim \rightarrow T$ である.)

²⁰ もしくはこんなことをしなくても, 単射は $\underline{X} \rightarrow \underline{Y}$ の射に * 入れれば明らか. 全射は $\text{Cond}_{<\kappa} \subset \text{Cond}$ なので κ 制限してよく米田の定理からわかる.

²¹ $X \mapsto \underline{X}$ は右随伴射なので colim を保つとは限らず, この様なまどろっこしい証明になる.

²² $(h_1, 1) \sim (h_2, 1)$ は $(h_1, 1) \sim (h', 2) \sim (h_2, 1)$ なる h' が存在することとする. が今回は $(h_1, 1) \sim (h_1, 2)$ が言えている.

□

5.7 [Sch19, Proposition 2.15, Theorem 2.16](=定理 50)(4) と (5) の証明

Proof of Theorem 50 (4). X をコンパクト生成 weak Hausdorf(CGWH) とする. qs 性を示す. 57 から $Y_i \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ かつ $\underline{Y}_i \rightarrow \underline{X}$ となる $i = 1, 2$ について, $\underline{Y}_1 \times_X \underline{Y}_2$ が qc であることを示せば良い.

$G : X \mapsto \underline{X}$ は右随伴で極限と可換なので, 直積とも可換する. よって $\underline{Y}_1 \times_X \underline{Y}_2 \cong \underline{Y}_1 \times_{\underline{X}} \underline{Y}_2$ である.

ここで $\underline{Y}_1 \times_X \underline{Y}_2$ がコンパクトハウスドルフであることを示す. $f_i : Y_i \rightarrow X$ を連続写像とする. $T := (f_1 \sqcup f_2)(Y_1 \sqcup Y_2)$ とすると 61 から T はコンパクトハウスドルフである. そして $T = \text{Im}(f_1) \cup \text{Im}(f_2)$ である. よって

$$Y_1 \times_X Y_2 = Y_1 \times_T Y_2$$

となるので, $Y_1 \times_X Y_2$ はコンパクトハウスドルフである以上より 55 から $\underline{Y}_1 \times_X \underline{Y}_2$ は qs になり, \underline{X} は qs となる.

後半の主張「 $\underline{X}_{\text{qs}}$ ならば X が WH」については (5) から従う. ここで \underline{X} が qs ならば X は T_1 なので $\underline{X}(\ast)_{\text{top}}$ は X と同相になる.²³

□

Proof of Theorem 50 (5). [1] T を \underline{X} の余極限でかく. T を qs condences set とする. ある強極限基数 κ をとって $T : \mathbf{ED}_{<\kappa}^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$ として良いすると 23 から T は \underline{X} の余極限でかける.

この構成方法を詳しく見る. $J = 1 \downarrow T$ とする. これは次で定められる圏である.

- object $(X, x) \in \mathbf{ED}_{<\kappa}^{\text{op}} \times T(X)$ ($x : 1 \rightarrow TX$ を $x \in T(X)$ と見る)
- Morphism $h : (X, x) \rightarrow (X', x') \in \text{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}^{\text{op}}}(X, X')$ について, $h : X' \rightarrow X$ かつ $T(h)(x) = x'$ とする. (これは $T(h) : T(X) \rightarrow T(X')$ があるから well defined である.)

反変関手 $M : J^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}^{\mathbf{ED}_{<\kappa}^{\text{op}}}$ を

- object $(X, x) \mapsto \text{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(\cdot, X)$
- Morphism $h : (X, x) \rightarrow (X', x')$ in J^{op} について, $h : X' \rightarrow X$ in $\mathbf{ED}_{<\kappa}^{\text{op}}$ より, $h : X \rightarrow X'$ なる連続写像があるので $h \circ : \text{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(\cdot, X) \rightarrow \text{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(\cdot, X')$

として定める.²⁴ すると T は M の余極限

$$T \cong \text{colim}_{M:(1\downarrow T)^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}^{\mathbf{ED}_{<\kappa}^{\text{op}}}} M(X, x) = \text{colim}_{M:(1\downarrow T)^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}^{\text{op}}_{<\kappa}} \text{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(\cdot, X)$$

である.

[2] T を $\underline{X} \subset T$ となるものの余極限でかく

米田から $x \in T(X) \cong \text{Nat}(\underline{X}, T)$ とみなせる. これは $S \in \mathbf{ED}_{<\kappa}$ について $\text{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(S, X) \rightarrow T(S)$ を $f \mapsto f(x)$ で定める自然変換である.

²³つまり $\kappa - \text{cg}$ と cg の位相が同じになり基数 κ に依存しなくなる.

²⁴なぜ”in J^{op} ”と書いているかという方向がわからなくなるからである.

$T_{X,x} := \text{Im}(x) \subset T$ おく. T は qs なので, 58 から $T_{X,x}$ も qs. $x : \underline{X} \rightarrow T_{X,x}$ より qc である. よって 50 (3) から, $T_{X,x} \cong \underline{S_{X,x}}$ となるコンパクトハウスドルフ空間 $S_{X,x}$ が存在する. $(1 \downarrow T)^{op}$ 内の射について $h : (X, x) \rightarrow (X', x')$ 次の可換図式が成り立つ.

$$\begin{array}{ccc}
\underline{S_{X,x}} & \cong & T_{X,x} = \text{Im}(x) \longleftarrow \xrightarrow{x} \underline{X} = \text{hom}(\cdot, X) & & (X, x) \\
& & \cap & & \downarrow h \\
\underline{S_{X',x'}} & \cong & T_{X',x'} = \text{Im}(x') \longleftarrow \xrightarrow{x'} \underline{X'} = \text{hom}(\cdot, X') & & (X', x')
\end{array}$$

$\text{Cond}_{<\kappa}$

$(1 \downarrow T)^{op}$

ここで $h : T_{X,x} \subset T_{X',x'}$ という monic 射が存在するのは, 自然変換として $x = x' \circ h$ が成り立つからである.

$f_{(X,x) \rightarrow (X',x')} : S_{X,x} \rightarrow S_{X',x'}$ という連続な単射を得る. そして $f_{(X,x) \rightarrow (X',x')}(S_{X,x})$ は閉集合である. また $h_1, h_2 : (X, x) \rightarrow (X', x')$ ならば $h_1 = h_2 : T_{X,x} \subset T_{X',x'}$ である.²⁵ 特に $h_1 = h_2 : S_{X,x} \rightarrow S_{X',x'}$ である.

$$T \cong \text{colim}_{M:(1 \downarrow T)^{op} \rightarrow \mathbf{Set}^{<\kappa}} \text{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}}(\cdot, X) \cong \text{colim}_{M:(1 \downarrow T)^{op} \rightarrow \mathbf{Set}^{<\kappa}} \text{hom}_{\mathbf{ED}_{<\kappa}} T_{X,x}$$

ある. よって $T_{X,x} = \underline{X} \subset T$ の余極限で T を表すことができた.

[3] $T(*)$ をコンパクトハウスドルフ空間の余極限で表す.

$F : T \mapsto T(*)_{top}$ は左随伴で colim と可換するので

$$T(*)_{top} \cong \text{colim}_{S:(1 \downarrow T)^{op} \rightarrow \mathbf{Top}} S_{X,x}$$

となる. ここでこの余極限は次の余極限である

- $(1 \downarrow T)$ の $\text{object}(X, x)$ について, $S(X, x) := S_{X,x}$
- $(1 \downarrow T)^{op}$ の morphism $h : (X, x) \rightarrow (X', x')$ について連続単射 $h : S_{X,x} = \underline{S_{X,x}}(*) \rightarrow \underline{S_{X',x'}}(*)$ を対応させる.

$(1 \downarrow T)^{op}$ が filtered category になることを示す. $(1 \downarrow T)^{op}$ で $h : (X, x) \rightarrow (X', x')$ とは $h : X \rightarrow X'$ 連続写像と $T(h) : T(X') \rightarrow T(X)$ について $T(h)x' = x$ となる組であることに注意しつつフィルター圏の定義を確かめる.

- $(X_1, x_1), (X_2, x_2) \in \text{Ob}((1 \downarrow T)^{op})$ について,

$$(X_1 \sqcup X_2, (x_1, x_2)) \in \mathbf{ED}_{<\kappa} \times T(X_1 \sqcup X_2) \cong \mathbf{ED}_{<\kappa} \times T(X_1) \times T(X_2)$$

とする. $f_i : X_i \rightarrow X_1 \sqcup X_2$ とすれば, これは連続写像で, $T(f_i) : T(X_1 \sqcup X_2) \rightarrow T(X_i)$ は射影であるので, $f_i : (X_i, x_i) \rightarrow (X_1 \sqcup X_2, (x_1, x_2))$ を得る.

²⁵包含写像を当てているので

- $f, g : (X_1, x_1) \rightarrow (X_2, x_2)$ ならば $f = g : S_{X_1, x_1} \rightarrow S_{X_2, x_2}$ である.

以上より $T(*)$ はコンパクトハウスドルフ空間の包含写像によるフィルター余極限でかけるので, 61 から $T(*)_{top} = \text{colim}_{S:(1 \downarrow T)^{op} \rightarrow \mathbf{Top}} S_{X, x}$ は weak Hausdorff となる.

□

A 発表で言及できなかった内容のまとめ

今回の発表で言及できなかった内容を下にまとめておく。

A.1 整列集合

定義 63. A を集合とする. 関係 \leq が条件

1. (反射法則) $x \in A, x \leq x$
2. (反対称法則) $x, y \in A, x \leq y$ and $y \leq x \Rightarrow x = y$
3. (推移法則) $x, y, z \in A, x \leq y$ and $y \leq z \Rightarrow x \leq z$

を満たすとき, \leq を (反射型) 順序という. $x < y$ を $x \neq y$ かつ $x \leq y$ で定義する.
さらに $(A, <)$ が整列集合とは次を満たすこととする.

1. $(A, <)$ が全順序. つまり任意の $x, y \in A$ について $x < y$ か $y < x$ のどちらかが成立する.
2. $B \subset A$ なる部分"集合"について, 最小元が存在する.

A.2 位相空間 CGWH について

定義 64. [Str, Definition 1.1 ,1.2] X を位相空間とし, \mathfrak{B} を X の閉集合系とする.

1. $Y \subset X$ が k -closed とは任意のコンパクトハウスドルフ空間 K からの連続写像 $u : K \rightarrow X$ について $u^{-1}Y$ が閉集合となるもの.
2. k -closed 集合を $k\mathfrak{B}$ と表す. $\mathfrak{B} \subset k\mathfrak{B}$ である
3. kX を $(X, k\mathfrak{B})$ という位相空間とする.
4. X がコンパクト生成空間 (CG) とは $X = kX$ となる位相空間である.
5. X が Weak Hausdorff(WH) とは任意のコンパクトハウスドルフ空間 K からの連続写像 $u : K \rightarrow X$ について $u(K)$ が閉集合となるもの

A.2.1 CGWH の例

定義 65. [Str] X 位相空間, $Y \subset X$ 部分集合とする. Y が sequentially closed であるとは任意の $y_n \in Y$ かつ $y_n \rightarrow x$ となるならば $x \in Y$ となる.
 X が sequential space とは sequentially closed 部分集合が閉集合となること.

注意 66. sequentially closed ならば T_1 である. これは $y_n = x$ という点列を考える

第一可算集合 (任意の点が可算開近傍系を持つ) ならば sequentially closed なぜならば, Z を sequentially closed 集合としたら, $x \in \bar{Z}$ について $y_n \rightarrow x$ となる Z の点列で収束するものが可算開近傍系から作れるからである.

特に距離空間は sequentially closed

命題 67. [Str, Prop 1.6] sequentially space は CG

Proof. $Y \subset X$ を k-closed 集合とする. Y が sequentially closed であることを示す. $y_n \in Y$ かつ $y_n \rightarrow x$ とおく. $x \in Y$ を示せば良い.

K を \mathbb{N} の一点コンパクト化とする. つまり $V \subset K$ が開集合であるとは, $V \subset \mathbb{N}$ または 「 $\infty \in V$ かつ $K \setminus V$ は有限集合」 である.

$u: K \rightarrow X$ を $u(n) = y_n, u(\infty) = x$ とおく. これは $y_n \rightarrow x$ より連続写像になる. よって Y は k 閉集合より, $u^{-1}Y$ は $\mathbb{N} \subset u^{-1}Y \subset K$ となる閉集合. よって K の開集合の定義から $u^{-1}Y = K$. $x \in Y$ となる. □

命題 68. [Str, Prop 1.7] locally compact Hausdorff ならば CGWH

Proof. X を locally compact Hausdorff とする. CG を示せば良い. $Y \subset X$ を k-closed 集合とする. $\bar{Y} = Y$ を示す.

$x \in \bar{Y}$ とする. X 局所コンパクトより $x \in U$ 開集合で $K := \bar{U}$ がコンパクトとなるものがある. よって $j: K \rightarrow X$ を考えると明らかに連続で, Y は k-closed 集合より $K \cap Y = j^{-1}Y$ は K での閉集合である.

$x \in V \cap K$ で V を X での開集合とする. すると $x \in V \cap U$ より $x \in \bar{Y}$ から $V \cap U \cap Y \neq \emptyset$ となる. よって $V \cap (K \cap Y) \neq \emptyset$ である.

これより任意の x を含む " K での開集合 $V \cap K$ " について $(V \cap K) \cap (K \cap Y) \neq \emptyset$ である. これは閉包の定義から $K \cap Y$ の " K での閉包" に x が属する. 今 $K \cap Y = j^{-1}Y$ は K での閉集合であるので, $x \in K \cap Y$ となる. つまり $x \in Y$ である. □

A.2.2 CG の性質

補題 69. [Str, Cor1.10] XCG で Y 位相空間の時, $f: X \rightarrow Y$ 連続は $f: X \rightarrow kY$ が連続と同値

特に $Y \mapsto kY$ は忘却関手 $X \mapsto X$ の右随伴であり

$$\text{hom}_{\text{Top}}(X, Y) = \text{hom}_{\text{CG}}(X, kY)$$

である.

Proof. 閉集合系は $\mathfrak{B}_Y \subset k\mathfrak{B}_Y$ である. よって右から左は自明である.

$f: X \rightarrow Y$ 連続とする. $Z \subset Y$ が k-closed として, $f^{-1}Z \subset X$ が閉集合を示す. XCG なので $f^{-1}Z$ が k-closed を示せば良い. $u: K \rightarrow X$ をコンパクトハウスドルフ空間からの連続写像とする. $u^{-1}(f^{-1}Z)$ が閉集合を示せば良い. これは $f \circ u: K \rightarrow X \rightarrow Y$ は連続なので明らか. □

命題 70. [Str, Prop2.1] X CG かつ \sim 同値関係ならば X/\sim も CG

Proof. $\pi : X \rightarrow X/\sim$ を商写像とする. $Z \subset X/\sim$ を k -closed とする. Z が閉集合であることを示せば良い.

69 から $\pi : X \rightarrow k(X/\sim)$ も連続であるので, $\pi^{-1}Z$ は X の閉集合である. π は商写像なので, Z は閉集合である. \square

命題 71. [Str, Prop2.2] $\{X_i\}_{i \in I}$ を CG の族とする. (ただし I は集合とする) この時 $\sqcup X_i$ も CG

Proof. $Z \subset \sqcup X_i$ を k -closed とする. Z が閉集合であることを示せば良い. これは $\eta_i : X_i \rightarrow \sqcup X_i$ を包含写像として, $Z_i := X_i \cap \eta_i^{-1}Z$ としたとき Z_i が X_i で閉集合であることを示せば良い. X_i CG なので Z_i が k -closed であることを示せば良い

これは $u : X_i \rightarrow X_i$ をコンパクトハウスドルフ空間からの連続写像とすれば $u^{-1}Z_i = (\eta_i \circ u)^{-1}Z$ であることから明らかである. \square

定義 72. [Str, Def 2.3] X, Y CG についてその直積 $k(X \times Y)$ を下で定める

- 集合としては $X \times Y$
- 位相としては $k(\mathfrak{B}_X \times \mathfrak{B}_Y)$ とする.

同様に $k(\prod X_i)$ を積位相空間に k 化したもので定める.

命題 73. [Str, Prop2.4] $\{X_i\}_{i \in I}$ を CG の族とする.

1. $p_i : k(\prod X_i) \rightarrow X_i$ を射影とすると, これは連続
2. 任意の CG である Y について, $f : Y \rightarrow k(\prod X_i)$ が連続であることは, 各 $p_i \circ f$ が連続であることと同値

よって $k(\prod X_i)$ は CG の圏の直積となる.

Proof. (1). 69 より $p_i : k(\prod X_i) \rightarrow X_i$ が連続は, $\prod X_i$ で連続であることと同じであるので.

(2) については右から左のみ非自明. $p_i \circ f$ が連続であるとすると, $f : Y \rightarrow \prod X_i$ は連続である. よって 69 より k 化した $k(\prod X_i)$ でも連続となる. \square

最後に次の事実を証明なしで書いておく.

命題 74. [Str, Prop 2.20] $f : W \rightarrow X, g : Y \rightarrow Z$ を CG の商写像とする時 $f \times g : k(W \times Y) \rightarrow k(X \times Z)$ も商写像である

証明は連続写像の空間 $C(X, Y)$ を用いるのでかなり混みいる. 詳しくは [Str] を参照してほしい.

A.2.3 62 の証明

命題 75. [Str, Prop2.14] X を CG とする. X が weak hausdorff であることは $\Delta_X := \{(x, x) | x \in X\} \subset X \times X$ が $k(X \times X)$ で閉集合であることと同値 (つまり Δ_X が普通の直積 $X \times X$ の k-closed であることと同値)

Proof. [1] X を Weak Hausdorff とする. 任意のコンパクトハウスドルフ空間からの連続写像 $u = v \times w : K \rightarrow k(X \times X)$ について $u^{-1}\Delta_X := \{a \in K | v(a) = w(a)\}$ が K の閉集合であることを示せば良い.

$a \notin u^{-1}\Delta_X$ とする. $a \in Z \subset K \setminus u^{-1}\Delta_X$ となる K の開集合の存在を示す. $v(a) \neq w(a)$ である. X は T_1 なので

$$U := \{b \in K | v(b) \neq w(a)\} = v^{-1}(X \setminus \{w(a)\})$$

は K の開集合で a を含む. K はコンパクトハウスドルフ空間であるので $a \in V \subset \bar{V} \subset U$ となる開集合 V が存在する. $v : K \rightarrow X$ は連続で X は弱 Hausdorff なので, $v(\bar{V}) \subset X$ は閉集合である U の定め方から $w(a) \neq v(\bar{V})$ なので,

$$a \in w^{-1}(X \setminus v(\bar{V})) =: Z$$

であり, Z は開集合である. そして $Z \subset K \setminus u^{-1}\Delta_X$ でありいえた.

[2] $\Delta_X := \{(x, x) | x \in X\} \subset X \times X$ が $k(X \times X)$ で閉集合であるとする. 任意のコンパクトハウスドルフ空間からの連続写像 $u : K \rightarrow X$ について $u(K)$ が閉集合であることを示せば良い. X は CG なので任意のコンパクトハウスドルフ空間からの連続写像 $v : L \rightarrow X$ について $v^{-1}u(K) \subset L$ が閉集合であることを示せば良い.

$$M := \{(a, b) \in K \times L | u(a) = v(b)\} = K \times_X L \subset K \times L$$

と定める. すると定義から $M = (u \times v)^{-1}\Delta_X$ であり, $u \times v : K \times L \rightarrow k(X \times X)$ は連続写像なので M は閉集合である. 射影 $pr_L : K \times L \rightarrow L$ は閉写像であるので

$$v^{-1}u(K) = pr_L(M)$$

であるので言えた. □

系 76. [Str, Cor2.21] X CG, \sim を X 上の同値関係とする. X/\sim が WH であることは,

$$R := \{(x, y) | x \sim y\} \subset X \times X$$

としたとき R が $k(X \times X)$ 上の閉集合であることと同値. (つまり X の通常の積位相で k-closed であることと同値)

Proof. X/\sim が WH であることは,

$$\Delta_{X/\sim} \subset (X/\sim) \times (X/\sim)$$

が $k((X/\sim) \times (X/\sim))$ の閉集合であることと同値. ここで $\pi : X \rightarrow X/\sim$ を商写像として

$$\pi \times \pi : k(X \times X) \rightarrow k((X/\sim) \times (X/\sim))$$

とおくと 74 から商写像である. よって $\Delta_{X/\sim}$ が $k((X/\sim) \times (X/\sim))$ の閉集合であることは

$$R = (\pi \times \pi)^{-1} \Delta_{X/\sim}$$

が $k(X \times X)$ の閉集合であることと同値である. □

補題 77. X_i 位相空間とし $X = \sqcup X_i$ とするとき

$$kX = \sqcup kX_i$$

特に k-closed 集合の直和は k-closed.

Proof. $\pi_i : X_i \rightarrow X$ は連続なので $\pi_i : kX_i \rightarrow kX$ も連続である. 示すことは $V \subset X$ について V が k-closed であることは各々 $\pi_i^{-1}V \subset X_i$ が k-closed であることと同値であることである.

$V \subset X$ が k-closed とする. すると, $\pi_i : kX_i \rightarrow kX$ も連続より, $\pi_i^{-1}V \subset X_i$ k-closed である.

逆に $\pi^{-1}V \subset X_i$ k-closed であるとする. $u : K \rightarrow X$ をコンパクトハウスドルフ空間からの連続写像とする. $u(K) \subset X = \cup_i \pi_i(X_i)$ より $u(K)$ コンパクトなので, $u(K) \subset \cup_{i=1}^n \pi_i(X_i)$ である. よってこれより

$$u^{-1}(V) = \cup_{i=1}^n \{k \in K \mid u(k) \in \pi_i(\pi^{-1}V_i)\}$$

今 $\pi_i^{-1} : \pi_i(X_i) \rightarrow X_i$ を $(x_i, i) \mapsto x_i$ で定めると同相写像になる. よって

$$\{k \in K \mid u(k) \in \pi_i(\pi^{-1}V_i)\} = (\pi_i^{-1} \circ u)(k) \in \pi^{-1}V_i$$

$\pi_i^{-1} \circ u : K \rightarrow X_i$ は連続なので, $\{k \in K \mid u(k) \in \pi_i(\pi^{-1}V_i)\}$ は k-closed となり $u^{-1}(V)$ も closed となる, □

補題 78. [Str, Lemma 3.3](=補題 62)

I small filtered category とし関手 $X : I \rightarrow \mathbf{CGWH}$ とする. さらに $f : i \rightarrow j$ について $Xf : X_i \rightarrow X_j$ は連続な単射で $Xf(X_i) \subset X_j$ は X_j で閉集合であるとする.

この時 $\text{colim}_{i \in I} X_i$ は CGWH

Proof. 以下 X という位相空間について $k(X)$ を k-closed 閉集合を集めた位相空間とする.

$i, j \in I$ について $f_{ik} : i \rightarrow k, f_{jk} : j \rightarrow k$ となる k を取り

$$R_{ij} := X_i \times_{X_k} X_j := \{(x_i, x_j) \mid f_{ik}(x_i) = f_{jk}(x_j)\}$$

と定める. これは R_{ij} は k の取り方によらない. (なぜならば $Xf : X_i \rightarrow X_j$ は単射だから $k \rightarrow k'$

となる射がある場合に同じことが示せる. また $R_{ii} = \Delta_{X_i}$ となる) また

$$R_{ij} = \{(x_i, x_j) | f_{ik}(x_i) = f_{jk}(x_j)\} = (f_{ik} \times f_j)^{-1} \Delta_{X_k}$$

であり X_k は CGWH なので 75 より $\Delta_{X_k} \subset X_k \times X_k$ は k-closed である. これより 69 から, $f_{ik} \times f_j : k(X_i \times X_j) \rightarrow k(X_k \times X_k)$ は連続なので R_{ij} は $X_i \times X_j$ の k-closed 集合である.

$Y := \sqcup_{i \in I} X_i$ とおき $\eta_i : X_i \rightarrow Y$ を包含写像とする. すると有限極限とフィルター余極限の交換から $Y \times Y$ と $\sqcup_{i,j} (X_i \times X_j)$ は同相である. よって

$$R := \sqcup_{i,j \in I} R_{ij} \subset \sqcup_{i,j} (X_i \times X_j) \cong Y \times Y$$

とすると R_{ij} は k-closed であるので 77 から R は k-closed である.

$x \sim y \Leftrightarrow (x, y) \in R$ で 2 項関係を入れる. すると \sim は同値関係で

$$\operatorname{colim}_{i \in I} X_i \cong Y / \sim$$

となる. 同値関係になることは $R_{ij} := \{(x_i, x_j) | f_{ik}(x_i) = f_{jk}(x_j)\}$ であることを考えると

1. $x \sim x$ は $R_{ii} = X_i \times X_i$ であるので
2. $x \sim y$ ならば $R_{ij} \cong R_{ji}$ を $(x_i, x_j) \rightarrow (x_j, x_i)$ であるので $y \sim x$
3. $x \sim y, y \sim z$ かつ $(x, y) \in R_{ij}, (y, z) \in R_{jk}$ について, $i, j, k \rightarrow l$ なる l をとると言える.

さらに $\operatorname{colim}_{i \in I} X_i$ の構成方法は Y に同値関係 $(x_i, i) \sim_c (x_j, j)$ を $i, j \rightarrow k$ を取り $f_{ik}(x_i) = f_{jk}(x_j)$ として入れるので, Y / \sim と同相である.

70, 71 から Y / \sim は CG である. WH に関しては $R \subset Y \times Y$ が k-closed なので 76 より言える. □

A.2.4 h 化

以下 \sim を X 上の同値関係とした時

$$R_\sim = \{(x, y) | x \sim y\} \subset X \times X$$

で定める

命題 79. [Str, Prop2.22] X を CG とする.

$$\mathcal{R} := \{\sim | X \text{ 上の同値関係で } R_\sim \text{ が } k(X \times X) \text{ で閉}\}$$

とおき $x \sim_{\min} y$ を $(x, y) \in \bigcap_{\sim \in \mathcal{R}} R_\sim$ で定める. このとき \sim_{\min} は X の同値関係であり, X / \sim_{\min} は CGWH となる.

さらに

$$h : \text{CG} \rightarrow \text{CGWH}$$

を $h(X) := X / \sim_{\min}$ で定めれば, これは包含関手の左随伴射であり

$$\text{hom}_{\text{CGWH}}(h(X), Y) \cong \text{hom}_{\text{CG}}(X, Y)$$

となる. つまり任意の CGWH 空間 Y への連続写像は $h(X)$ を経由する

Proof. $\sim \in \mathcal{R}$ について次の三つが成り立つ.

1. $(x, x) \in R_{\sim}$
2. $(x, y) \in R_{\sim}$ ならば $(y, x) \in R_{\sim}$
3. $(x, y) \in R_{\sim}$ かつ $(y, z) \in R_{\sim}$ ならば $(x, z) \in R_{\sim}$

以上より \sim_{\min} を

$$x \sim_{\min} y \Leftrightarrow (x, y) \cap_{\sim \in \mathcal{R}} R_{\sim}$$

で入れればこれは明らかに同値関係になる. そして $R_{\sim_{\min}}$ は $k(X \times X)$ の閉集合なので $h(X) = X / \sim_{\min}$ は WH である.

CGWH 空間 Y への連続写像 $f: X \rightarrow Y$ を考える.

$$R := \{(x, x') \in X \times X \mid f(x) = f(x')\} = (f \times f)^{-1} \Delta_Y$$

とおくとこれは X の同値関係を定める. よって $R_{\sim_{\min}} \subset R$ であることから $hX \rightarrow Y$ を誘導し唯一性もわかる. \square

A.2.5 圏 CG と CGWH の性質.

以下は [Fra] を参考にした.

CG は完備かつ余完備でカルテシアン閉である.

- \lim については位相の \lim をとった後に k -closed なものを付け加える
- colim はそのまま
- $Y^Z = C(Y, Z)$ で $C(Y, Z)$ には compact open topology の k 化を入れる

また $\mathbf{Top} \rightarrow \mathbf{CG}$ を $X \mapsto kX$ という k -closed な位相を付け足したものにするとこれは右随伴関手である.

CGWH は完備かつ余完備でカルテシアン閉である.

- \lim については CG の \lim とする.
- colim は CG の colim を取った後に h 化する. (閉な同値関係で一番小さいものでわる)
- $Y^Z = C(Y, Z)$ で $C(Y, Z)$ には compact open topology の k 化を入れる

また $\mathbf{CG} \rightarrow \mathbf{CGWH}$ を $X \mapsto hX$ という h 化 (閉な同値関係で一番小さいものでわる) に関手とするとこれは左随伴関手である.

なぜこれらがトポロジーで重要かという次のクラスになっているからである.

定義 80. 圏 C が "convenient category of topological space" とは次の条件を満たす \mathbf{Top} の部分圏とする.

1. CW -complex は C の Object
2. 完備かつ余完備
3. カルテシアン閉

上からすぐに次がわかる.

定理 81. \mathbf{CG} や \mathbf{CGWH} は convenient category of topological space.

A.3 圏論関係

A.3.1 米田の補題

定義 82. \mathcal{D} が locally small とする. $K : \mathcal{D} \rightarrow \mathbf{Set}$ が表現可能とはある $r \in \text{Ob}(\mathcal{D})$ があって $\text{hom}_{\mathcal{D}}(r, \cdot) \cong K$ が自然同型となること

補題 83 (米田の補題). [マックレーン, 3.2 節] \mathcal{D} が locally small とする. $K : \mathcal{D} \rightarrow \mathbf{Set}$ 関手に関して

$$y : \text{Nat}(\text{hom}_{\mathcal{D}}(r, \cdot), K) \cong Kr, \quad \tau \mapsto \tau_r(id_r)$$

は全単射となる.

Proof. $\tau \in \text{Nat}(\text{hom}_{\mathcal{D}}(r, \cdot), K)$ について

$$\begin{array}{ccc} r & \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, r) & \xrightarrow{\tau_r} & Kr \\ \downarrow g & \downarrow g \circ & & \downarrow Kg \\ d & \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, d) & \xrightarrow{\tau_d} & Kd \end{array}$$

が成り立っている.

(全射) $g \in Kr$ について $\tau_d : \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, d) \rightarrow Kd$ を $f \mapsto K(f)(g)$ で定めれば自然同型である.

(単射) $\tau_r(id_r) = \tau'_r(id_r)$ ならば, $g \in \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, d)$ について $\tau_d(g) = \tau'_d(g)$ は上の図式からわかる. (τ_r の部分が等しいから!)

□

同様に $\text{hom}_{\mathcal{D}}(\cdot, r) : C^{op} \rightarrow \mathbf{Set}$ について次の米田が成り立つ

$$y : \text{Nat}(\text{hom}_{\mathcal{D}}(\cdot, r), K) \cong Kr, \quad \tau \mapsto \tau_r(id_r)$$

系 84. [マックレーン, 3.2 節] \mathcal{D} が locally small とする. $r, r' \in \text{Ob}(\mathcal{D})$ について

$$\tau : \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, \cdot) \cong \text{hom}_{\mathcal{D}}(r', \cdot)$$

となる自然同型があるならば, $r \cong r'$

Proof. $f = \tau_r(id_r) \in \text{hom}_{\mathcal{D}}(r', r)$ をとり, $g = \tau_{r'}^{-1}(id_{r'})$ とすると以下の図式を得る.

$$\begin{array}{ccc} id_r \in \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, r) & \xrightarrow{\tau_r} & \text{hom}_{\mathcal{D}}(r', r) \ni f \\ \uparrow f \circ & & \uparrow f \circ \\ g \in \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, r') & \xrightarrow{\tau_{r'}} & \text{hom}_{\mathcal{D}}(r', r') \ni id_{r'} \end{array}$$

よって一番左の図式により $f \circ g = id_r$ となる.

同じ議論を r' に行うと $f = (\tau_r^{-1})^{-1}(id_r)$ に注意すると

$$\begin{array}{ccc} id_{r'} \in \text{hom}_{\mathcal{D}}(r', r') & \xrightarrow{\tau_{r'}^{-1}} & \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, r') \ni g \\ \uparrow g \circ & & \uparrow g \circ \\ f \in \text{hom}_{\mathcal{D}}(r', r) & \xrightarrow{\tau_r^{-1}} & \text{hom}_{\mathcal{D}}(r, r) \ni id_r \end{array}$$

を得て, よって一番左の図式により $g \circ f = id_{r'}$ となる. よって $r \cong r'$ となる. \square

A.3.2 極限

定理 85. 余積とコイコライザーを持つ圏は余極限を持つ. 同様に積とイコライザーを持つ圏は極限を持つ.

Proof. $G : I \rightarrow C$ について colim は

$$f, g : \sqcup_{a \in \text{Mor}(I)} G(\text{dom}(a)) \rightarrow \sqcup_{i \in \text{Ob}(I)} Gi$$

$$f_{G(\text{dom}(a))} = id_{G(\text{dom}(a))} : G(\text{dom}(a)) \rightarrow G(\text{dom}(a)) \quad g_{G(\text{dom}(a))} = a : G(\text{dom}(a)) \rightarrow G(\text{cod}(a))$$

のコイコライザーとなるため.

同様に $G : I \rightarrow C$ について lim は

$$f, g : \prod_{i \in \text{Ob}(I)} Gi \rightarrow \prod_{a \in \text{Mor}(I)} G(\text{cod}(a))$$

$$f_i = id_{Gi} : Gi \rightarrow Gi \quad g_i = (a)_{i=\text{dom}(a)} : Gi \rightarrow G(\text{cod}(a))$$

のイコライザーとなるため.

□

A.3.3 フィルター圏・共終

定義 86. [マックレーン, 9.1 節] 圏 J がフィルターであるとは以下の二つの条件を満たす空でない圏とする

1. $j, j' \in \text{Ob}(J)$ についてある $j \rightarrow k, j' \rightarrow k$ が存在する
2. $a, b : j \rightarrow k$ について, $u : k \rightarrow m$ が存在して $ua = ub : j \rightarrow k \rightarrow m$

$F : J \rightarrow C$ がフィルター余極限とは J がフィルターなること.

定義 87 (共終). [マックレーン, 9.3 節] $L : I \rightarrow J$ が共終とは $k \in \text{Ob}(J)$ について $k \downarrow L$ が空でなく連結であること. わかりやすくいうと以下の 2 条件を満たすこと.

1. 任意の $y \in \text{Ob}(J)$ についてある $x \in \text{Ob}(I)$ があって $y \rightarrow L(x)$.
2. 任意の $y \in \text{Ob}(J), x, x' \in \text{Ob}(I)$ についてある

$$x = x_0 \leftarrow x_1 \rightarrow x_2 \cdots x_{2n-2} \leftarrow x_{2n-1} \rightarrow x_{2n} = x'$$

の列があって, 次の可換図式が成り立つこと

$$\begin{array}{ccccc}
 & & y & & \\
 & \swarrow & \downarrow & \searrow & \\
 L(x_{2i-2}) & \longleftarrow & L(x_{2i-1}) & \longrightarrow & L(x_{2i})
 \end{array}$$

定理 88. $L : I \rightarrow J$ が共終であり, 関手 $F : J \rightarrow X$ について $\text{colim}_{i \in I} FL(i)$ が存在する時, $\text{colim}_{j \in J} F(j)$ も存在し, canonical map

$$h : \text{colim}_{i \in J} FL(i) \rightarrow \text{colim}_{j \in J} F(j)$$

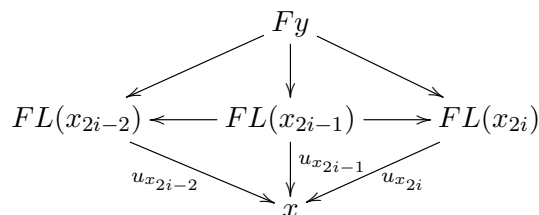
は同型になる.

Proof. [1] $\text{colim}_{j \in J} F(j)$ の存在 $x = \text{colim}_{i \in I} FL(i)$ とする. すると $\mu : FL \rightarrow \Delta c$ なる自然変換で普遍なものが存在する.

$k \in J$ について $u : k \rightarrow Li$ なる i を選んで

$$\tau_k : Fk \xrightarrow{Fu} FLi \xrightarrow{\mu_i} x$$

とおく. これは i の取り方によらない. これは次の図から明らかである.



これより $\tau : F \rightarrow \Delta x$ が cocone となる. こいつが普遍性を持つことを示せば良い.

つまり $\lambda : F \rightarrow \Delta y$ を別の cocone とするとき, ある $f : x \rightarrow y$ があって $\lambda = (\Delta f)\tau$ を示せば良い.

$\lambda L : FL \rightarrow \Delta y$ という自然変換を得るので $u : FL \rightarrow \Delta x$ の普遍性からある一意的な射 $f : x \rightarrow y$ があって $\lambda L = (\Delta f)\mu$ となる. よって $k \in J$ について $u : k \rightarrow Li$ を選べば

$$((\Delta f)\tau)_k = (\Delta f)_x \cdot \tau_k = (\Delta f)_x \cdot \mu_i \cdot Fu = \lambda_{Li} \cdot Fu = \lambda_k$$

となる. よって言えた. □

A.3.4 随伴

定義 89. [マックレーン, 4.1 節] A, X を locally small category とする. (F, G, φ) が X から A の随伴とは

- $F : X \rightarrow A, G : A \rightarrow X$ となる関手
- φ は $x \in Ob(X), a \in Ob(A)$ について

$$\varphi_{x,a} : hom_A(Fx, a) \cong hom_X(x, Ga)$$

が全単射になるものの族で x, a について自然である.

このとき $F \dashv G$ とかく. F は G の左随伴, G は F の右随伴という.

注意 90. hom 集合を使わずに定義するのであれば, 任意の $f : Fx \rightarrow a$ について右随伴射 $\varphi f : x \rightarrow Ga$ が唯一定まり,

$$\varphi(k \circ f) = Gk \circ \varphi f, \quad \varphi(f \circ Fh) = \varphi f \circ h \tag{4}$$

が任意の $h : x' \rightarrow x, k : a \rightarrow a'$ に成り立つこれは次の図からわかる

$$\begin{array}{ccc}
 f \in hom_A(Fx, a) \xrightarrow{\varphi} hom_X(x, Ga) & & f \in hom_A(Fx, a') \xrightarrow{\varphi} hom_X(x, Ga') \\
 k \downarrow & & \downarrow Fh \\
 hom_A(Fx, a) \xrightarrow{\varphi} hom_X(x, Ga) & & hom_A(Fx', a) \xrightarrow{\varphi} hom_X(x', Ga) \\
 & & \downarrow h \\
 & & hom_A(Fx', a) \xrightarrow{\varphi} hom_X(x', Ga)
 \end{array}$$

左随伴射 φ^{-1} の言葉で書けば

$$\varphi(g \circ h) = \varphi^{-1}g \circ Fk, \quad \varphi^{-1}(Gk \circ g) = k \circ \varphi^{-1}g$$

$a = Fx$ の場合,

$$\varphi_{x, Fx} : \text{hom}_A(Fx, Fx) \cong \text{hom}(x, GFx)$$

であるので, $\eta_x := \varphi_{x, Fx}(id_{Fx}) : x \rightarrow GFx$ を得る. 自然変換 $\eta : I \rightarrow GF$ を与えるなぜなら 4 から $h : x \rightarrow x'$ について

$$G(Fh) \circ \varphi(id_{Fx'}) = \varphi(Fh \circ id_{Fx'}) = \varphi(id_{Fx'} \circ Fh) = \varphi(id_{Fx}) \circ h$$

$$\begin{array}{ccc} x & \xrightarrow{\varphi} & GFx \\ \downarrow h & & \downarrow G(Fh) \\ x' & \xrightarrow{\varphi} & GFx' \end{array}$$

すると 4 から $f : Fx \rightarrow a$ について

$$\varphi(f) = \varphi(f \circ F(id_x)) = Gf \circ \varphi(id_x) = Gf \circ \eta_x$$

となる.

同様に $\varphi_{Ga, a}^{-1} : \text{hom}_X(Ga, Ga) \cong \text{hom}_A(FGa, a)$ $\epsilon_a = \varphi_{Ga, a}^{-1}(id_{Ga})$ とおくと同様のことが成り立つ.

まとめると次になる.

補題 91. [マックレーン, 4.1 節] A, X を locally small category とする. (F, G, φ) が X から A の随伴とする.

1. 上の η_x は x から G への普遍射, 自然変換 $\eta : I \rightarrow GF$ を与える. ここで $I, GF : X \rightarrow X$ である. また $\varphi(f) = Gf \circ \eta_x : x \rightarrow Ga$ である.
2. $\epsilon_a = \varphi_{Ga, a}^{-1}$ とおくと, F から a への普遍射, 自然変換 $\epsilon : FG \rightarrow I$ を与える. また $\varphi^{-1}(g) = \epsilon_a \circ Fg : Fx \rightarrow a$ である. ($g : x \rightarrow Ga$ とする)

η を unit, ϵ を counit という.

以下随伴 (F, G, η, ϵ) と言ったら

- $F : X \rightarrow A, G : A \rightarrow X$ となる関手
- $\eta : I \rightarrow GF$ を unit, $\epsilon : FG \rightarrow I$ を counit とする.

系 92. [マックレーン, 4.1 節] (F, G, φ) を X から A の随伴であるとする. $T : J \rightarrow A$ が極限 $\tau : \Delta(\lim T) \rightarrow T$ を持つならば, GT は極限 $G\tau : \Delta(G \lim T) \rightarrow GT$ と持つ. つまり右随伴射 G について, $\lim(GT) \cong G(\lim T)$ である. (right adjoint perverse limit)

同様に左随伴射 F について $\operatorname{colim} FT \cong F(\operatorname{colim} T)$ である.

Proof. 任意の $x \in X$ について

$$\operatorname{hom}_X(x, \lim(GT)) \cong \operatorname{hom}_X(x, G(\lim T))$$

を示せば良い. これは以下から言える.

$$\operatorname{hom}_X(x, G(\lim T)) \cong \operatorname{hom}_A(Gx, T) \cong \lim \operatorname{hom}_A(Gx, T) \cong \lim \operatorname{hom}_X(x, GT)$$

□

定理 93. [マックレーン, 4.3 節] 随伴 $(F, G, \eta, \epsilon) : X \rightarrow A$ について以下が成り立つ

1. $G : A \rightarrow X$ が忠実 (faithfull) は任意の $a \in A$ について ϵ_a がエピと同値
2. $G : A \rightarrow X$ が充満 (full) は任意の $a \in A$ について ϵ_a が分裂モニックと同値
3. $G : A \rightarrow X$ が充満忠実 (fully faithfull) は任意の $a \in A$ について $\epsilon_a : FGa \cong a$ が同型と同値

Proof.

$$\varphi^{-1} \circ G_{a,\cdot} : \operatorname{hom}_A(a, \cdot) \rightarrow \operatorname{hom}_X(Ga, G\cdot) \rightarrow \operatorname{hom}_A(FGa, \cdot)$$

を考える. これは $\epsilon_a : FGa \rightarrow a$ として ϵ_a^* と同じである. φ^{-1} が全単射より下の補題から「 ϵ_a^* エピ $\Leftrightarrow \epsilon_a^* = \varphi^{-1} \circ G_{a,\cdot}$. モニック $\Leftrightarrow G_{a,\cdot}$. モニック $\Leftrightarrow G : A \rightarrow X$ が忠実 (faithfull)」となる. □

補題 94. $f : b \rightarrow a$ について, $f^* : \operatorname{hom}_A(a, \cdot) \rightarrow \operatorname{hom}_A(b, \cdot)$ を自然変換とする. この時以下が成り立つ

1. f^* モニック は f エピと同値
2. f^* エピは f が分裂モニックと同値

これは定義から直ちに従う. (言い換えているに過ぎない)

A.3.5 圏同値

定義 95 (圏同値). [マックレーン, 4.4 節] 関手 $S : A \rightarrow C$ が圏同値であるとはある関手 $T : C \rightarrow A$ と $ST \cong I_C : C \rightarrow C$ かつ $TS \cong I : A \rightarrow A$ なる自然同型が存在すること. この時 T は S の左随伴でもあり右随伴でもある.

定義 96 (随伴圏同値). [マックレーン, 4.4 節] 随伴 $(F, G, \eta, \epsilon) : X \rightarrow A$ について, $\eta : I \rightarrow GF$, $\epsilon : GF \rightarrow I$ が共に自然同型である時, $(F, G, \eta, \epsilon) : X \rightarrow A$ は随伴圏同値と呼ぶ.

定理 97. [マックレーン, 4.4 節] 関手 $S : A \rightarrow C$ について次は同値

1. $S : A \rightarrow C$ は圏同値
2. $(S, T, \eta, \epsilon) : A \rightarrow C$ が随伴圏同値となるような T, η, ϵ が存在する
3. S fully faithful かつ $c \in \text{Ob}(C)$ についてある $a \in A$ があって $c \cong Sa$.

Proof. (2) \Rightarrow (1) 自明

(1) \Rightarrow (3) $a, a' \in \text{Ob}(A)$ について

$$\text{hom}_A(a, a') \cong \text{hom}_A(a, T Sa') \xrightarrow{\cong} \text{hom}_C(Sa, Sa')$$

によって全単射を得る. よって fully faithful. 任意の $c \in \text{Ob}(C)$ について, $c \cong S(Tc)$ より $a = Tc$ とおけば良い.

(3) \Rightarrow (2) $T : C \rightarrow A$ を構成する $c \in \text{Ob}(C)$ について $a \in A$ があって $\nu_c : c \cong Sa$ となるので, $Tc = a$ とする. $f : c \rightarrow c'$ について, S は fully faithful なので

$$\text{hom}_A(a, a') \rightarrow \text{hom}_C(Sa, Sa') \cong \text{hom}_C(c, c')$$

が全単射であり, $\nu_{c'}^{-1} \circ S(g) \circ \nu_c = f$ となる g が一意に存在する. $T(f) = g$ とおく.

よって S が T の右随伴であることと, $\eta : I \rightarrow ST$ と $\epsilon : TS \rightarrow I$ なる自然同型が存在することとを示せば良い. \square

A.3.6 Kan 拡張

定義 98. [マックレーン, 10.3 節] $K : M \rightarrow C, T : M \rightarrow A$ を関手とする. K に沿った T の右 Kan 拡張とは

- $R : C \rightarrow A$ 関手
- $\epsilon : RK \rightarrow T$ 自然変換

に二つ組み $(R, \epsilon : RK \rightarrow T)$ であって, 任意の $S : C \rightarrow A, \alpha : SK \rightarrow T$ について, $\alpha = \epsilon \cdot \sigma K : SK \rightarrow T$ となる自然変換 $\sigma : S \rightarrow R$ が唯一存在すること. このとき $R := \text{Ran}_K T$ とかく.

$\sigma \mapsto \epsilon \cdot \sigma K$ によって自然な全単射

$$\text{Nat}(S, R) = \text{Nat}(S, \text{Ran}_K T) \cong \text{Nat}(SK, T)$$

となる. よってこれがかっこよくいうと次の補題を得る.

補題 99. [マックレーン, 10.3 節] $K : M \rightarrow C$ を固定する. 任意の $T \in A^M$ ($T : M \rightarrow A$) について右 Kan 拡張 $(R, \epsilon) := (Ran_K T \in A^C, \epsilon_T : RK \rightarrow T)$ が存在すると仮定する. この時 $\beta : A^M \rightarrow A^C$ を

- $\beta T := Ran_K T$
- $\beta(g : T \rightarrow T')$ について $\beta(g) : Ran_K T \rightarrow Ran_{K'} T$ を, $S = Rank_T K : C \rightarrow A, \alpha = g \circ \epsilon_T : SK \rightarrow T$ として, 唯一存在する自然変換 $\beta(g) := \sigma : Ran_K T \rightarrow Ran_{K'} T'$ で $\alpha = g \circ \epsilon_T = \epsilon_T \cdots \beta(g)K$ となるもの.

で決めると,

$$F : A^C \rightarrow A^M \quad N : C \rightarrow A \mapsto N \circ K : M \rightarrow A$$

の右随伴, つまり

$$hom_{A^M}(F(N), T) = Nat(NK, T) \cong hom_{A^C}(N, Ran_K T) = Nat(N, Ran_K T)$$

となり, $\epsilon : I \rightarrow Ran_K \circ F$ は unit である.

定理 100 (点列極限としての右 Kan 拡張). [マックレーン, 10.3 節] $K : M \rightarrow C, T : M \rightarrow A$ を関手とする. 任意の $c \in Ob(C)$ について

$$T \circ Q : (c \downarrow K) \rightarrow M \rightarrow A$$

に関する極限 $\lim T \circ Q$ と $\mu : \Delta(\lim T \circ Q) \rightarrow TQ$ が存在すると仮定する. このとき $R : C \rightarrow A$ を

- $c \in Ob(C)$ について, $Rc := \lim(T \circ Q : (c \downarrow K) \rightarrow M \rightarrow A)$
- $g : c \rightarrow c'$ について $Rg : Rc \rightarrow Rc'$ となる射

とするとこれは関手になる

さらに $\epsilon : RK \rightarrow T$ は $m \in Ob(M)$ とすると $RKm = \lim T \circ Q \in Ob(A)$ と $\mu : \Delta RKm \rightarrow TQ$ について $\epsilon_m := \mu_{id_{Km}} : RKm \rightarrow Tm$ と定義する. そして (R, ϵ) は K に沿った T の右 Kan 拡張となる.

Proof. [0.] $Ob(c \downarrow K)$ と $Q : (c \downarrow K) \rightarrow M$ の定義について.

- $(m, x) : Ob(c \downarrow K)$ は $m \in Ob(M)$ かつ $x : c \rightarrow Km$
- Morphism $h : (m, x) \rightarrow (m', x') \in Hom_M(m, m')$ を $h : m \rightarrow m'$ で $x' = Kh \circ x$ となるもの

$$\begin{array}{ccccc} 1 & c \xrightarrow{x} Km & m & & \\ 1 \downarrow & id_c \parallel & \downarrow Kh & & h \downarrow \\ 1 & c \xrightarrow{x'} Km' & m' & & \end{array}$$

ここで $Q : (c \downarrow K) \rightarrow M$ を以下で定める

- $(m, x) \in \text{Ob}(c \downarrow K)$ について $Q(m, x) = m$
- $h : (m, x) \rightarrow (m', x') \in \text{Hom}_M(m, m')$ について $Q(h) = h$

[1.] R が関手になること. $c \in \text{On}(C)$ について, その極限 $a_c = \lim T \circ Q \in \text{Ob}(A)$ と $\mu : \Delta(\lim T \circ Q) \rightarrow TQ$ とは

1. $(a_c, \mu_{(m, x)})$ のくみ $(x : c \rightarrow Km)$, $\text{Ob}(c \downarrow K)$ 内の $h : (m, x) \rightarrow (m', x')$ について

- $\mu_{(m, x)} : a_c \rightarrow Tm$, つまり A 内で $\mu_{(m, x)} : a_c \rightarrow Tm$
- $TQh \circ \mu_{(m', x')} = \mu_{(m, x)} : a_c \rightarrow TQ(m, x)$,

2. $(a', \nu_{(m, x)})$ の組 $(x : c \rightarrow Km)$ で $h' : (m, x) \rightarrow (m', x')$ について

- $\nu_{(m, x)} : a' \rightarrow Tm$, つまり A 内で $\nu_{(m, x)} : a' \rightarrow Tm$
- $TQh' \circ \nu_{(m', x')} = Th' \circ \nu_{(m', x')} = \nu_{(m, x)} : a' \rightarrow TQ(m, x)$

となるものについて, ある $f : a \rightarrow a_c$ がただ一つ存在して, $\text{Ob}(c \downarrow K)$ 内の $h : (m, x) \rightarrow (m', x')$ について $\mu_{(m, x)} \circ f = \nu_{(m, x)} : a \rightarrow TQ(m, x) = Tm$ となる.

ここで, $x : c \rightarrow Km$ なので, m の情報も持っているので $\mu_x := \mu_x$ と書くことにする. すると $c \in \text{On}(C)$ について, その極限 $a_c = \lim T \circ Q \in \text{Ob}(A)$ と $\mu : \Delta(\lim T \circ Q) \rightarrow TQ$ とは

1. (a_c, μ_x) のくみ $(x : c \rightarrow Km)$, $\text{Ob}(c \downarrow K)$ 内の $h : (m, x) \rightarrow (m', x')$ について

- $\mu_x : a_c \rightarrow Tm$, つまり A 内で $\mu_x : a_c \rightarrow Tm$
- $TQh \circ \mu_x = \mu_x : a_c \rightarrow TQm$,

2. (a', ν_x) の組 $(x : c \rightarrow Km)$ で $h' : (m, x) \rightarrow (m', x')$ について

- $\nu_x : a' \rightarrow Tm$, つまり A 内で $\nu_x : a' \rightarrow Tm$
- $TQh' \circ \nu_{x'} = Th' \circ \nu_x : a' \rightarrow TQm$

となるものについて, ある $f : a \rightarrow a_c$ がただ一つ存在して, $\text{Ob}(c \downarrow K)$ 内の $h : (m, x) \rightarrow (m', x')$ について $\mu_x \circ f = \nu_x : a \rightarrow Tm$ となる.

よって $g : c \rightarrow c'$ について, その極限 $a'_c = \lim T \circ Q \in \text{Ob}(A)$ と $\mu' : \Delta(\lim T \circ Q) \rightarrow TQ$ を考える. この時 $x : c' \rightarrow Km$ なる組について $\mu'_{m, x} : a'_c \rightarrow Tm$ で $\mu_{m, x} : a'_c \rightarrow Tm$ がある.

そこで $(x \circ g, m)$ について $(x \circ g : c \rightarrow Km)$ で $\mu_{x \circ g} : a'_c \rightarrow Tm$ で $\mu'_x : a'_c \rightarrow Tm$ であるので, 普遍性から $Rg : a_c \rightarrow a'_c$ なる関手が存在する. そして以下が成り立つ. $x : c' \rightarrow Km$ とする.

$$\begin{array}{ccc} Rc = \lim TQ & \xrightarrow{\mu_{(x \circ g)}} & Tm \\ Rg \downarrow & & \parallel \\ Rc = \lim TQ' & \xrightarrow{\mu'_x} & Tm \end{array}$$

[2.] 自然変換 $\epsilon : RK \rightarrow T$ の定義. $m \in M$ について $\epsilon_m : RKm \rightarrow Tm$ で任意の $h : m \rightarrow m'$ について以下の図式が成り立つことをいう.

$$\begin{array}{ccc} RKm = \lim TQ_{Km} & \xrightarrow{\epsilon_m} & Tm \\ \downarrow RKh & & \downarrow Th \\ RKm' = \lim TQ'_{Km'} & \xrightarrow{\epsilon'_m} & T'm' \end{array}$$

を示せば良い. ここで $RKm = \lim T \circ Q \in Ob(A)$ と $\mu : \Delta RKm \rightarrow TQ$ とは (RKm, μ_x) のくみ $(x : Km \rightarrow Km)$, $Ob(c \downarrow K)$ 内の $h : (m, x) \rightarrow (m', x')$ について

- $\mu_x : RKm \rightarrow Tm$, つまり A 内で $\mu_x : RKm \rightarrow Tm$
- $TQh \circ \mu_{x'} = \mu_{(m,x)} : RKm \rightarrow TQ(m, x) = Tm$,

である. よって, $\epsilon_m := \mu_{id_{Km}} : RKm \rightarrow Tm$ とおけば良い.

この時 $h : m \rightarrow m'$ について $g = Rh : Km \rightarrow Km'$ と置いて [1] の事実を用いると

$$\begin{array}{ccc} RKm = \lim TQ & \xrightarrow{\mu_{id_m: Km \rightarrow Km}} & Tm \\ \downarrow Rg & \searrow \mu_{Kh: Km \rightarrow Km'} & \downarrow Th \\ RKm' = \lim TQ' & \xrightarrow{\mu_{id_{m'}: Km' \rightarrow Km'}} & Tm' \end{array}$$

となる. よって自然変換も言える.

[3] 右 Kan 拡張であること.

$S : C \rightarrow A$ と $\alpha : SK \rightarrow T$ が存在したとする. 示すことは自然変換 $\sigma : S \rightarrow R$ の唯一存在と $\alpha = \epsilon \cdot \sigma K : SK \rightarrow T$ である.

[3-1], $\sigma : S \rightarrow R$ の存在. これは $c \in Ob(C)$ と $\sigma_c : Sc \rightarrow Rc$ を作れば良い $f : c \rightarrow Km$ に対する図式を考える.

$$\begin{array}{ccccc} Rc = \lim(T \circ Q : (c \downarrow K) \rightarrow M \rightarrow A) & \xrightarrow{\mu_{f:c \rightarrow Km}} & Tm & \xrightarrow{Th} & Tm' \\ & \nearrow & \uparrow \alpha_m & & \uparrow \alpha'_m \\ Sc & \xrightarrow{Sf} & SKm & \xrightarrow{SKm} & SKm' \end{array}$$

これにより極限の定義から $\sigma_c : Sc \rightarrow Rc$ が唯一存在する. なぜならば, $(c \downarrow K)$ の写像 $h : (f, m) \rightarrow (f', m')$ について $(f : c \rightarrow Km, f' : c \rightarrow Km', h : m \rightarrow m', Kh \circ f = f')$ について上の可換図式がまわるからである.

[3-2] σ が自然になること. これは $g : c \rightarrow c'$ について $\sigma'_c \circ Sg = Rg \circ \sigma_c$ を示せば良い.

$f' : c' \rightarrow Km$ について

$$\begin{array}{ccccc}
 & & \mu_{f' \circ g : c \rightarrow Km} & & \\
 Rc & \xrightarrow{Rg} & Rc' & \xrightarrow{\mu'_{f' : c' \rightarrow Km}} & Tm \\
 \uparrow \sigma_c & & \uparrow \sigma_{c'} & & \uparrow \alpha'_m \\
 Sc & \xrightarrow{Sg} & Sc' & \xrightarrow{Sf'} & SKm \\
 & & S(f' \circ g) & &
 \end{array}$$

Rc' の普遍性に帰着させる.

$$\mu_{f' \circ g : c \rightarrow Km} \circ \sigma_c = \alpha'_m \circ S(f' \circ g) = \mu'_{f' : c' \rightarrow Km} \circ (\sigma_{c'} \circ Sg) : Sc \rightarrow Tm$$

である. $f' : c' \rightarrow Km$ についての極限を取れば $h : Sc \rightarrow Rc'$ で任意の f' について $\mu'_{f' : c' \rightarrow Km} \circ h = \alpha'_m \circ S(f' \circ g) : Sc \rightarrow Tm$ このような h はただ一つである. よって

$$\mu'_{f' : c' \rightarrow Km} \circ (\sigma_{c'} \circ Sg) = \mu'_{f' : c' \rightarrow Km} \circ h = \alpha'_m \circ S(f' \circ g) = \mu_{f' \circ g : c \rightarrow Km} \circ \sigma_c = \mu'_{f' : c' \rightarrow Km} \circ (Rg \circ \sigma_c)$$

より普遍性の唯一性から $h = \sigma_{c'} \circ Sg = Rg \circ \sigma_c$ である.

[3-3] $\alpha = \epsilon \cdot \sigma_K : SK \rightarrow T$ について. 示すことは, $m \in Ob(M)$ について

$$\alpha_m = \epsilon_m \cdot \sigma_{Km} : SKm \rightarrow Tm$$

である. $c = Km, f = id_{Km} : c = Km \rightarrow Km$ として [3.1] のような図式を考えると,

$$\begin{array}{ccc}
 Rc = \lim(T \circ Q : (c \downarrow K) \rightarrow M \rightarrow A) & \xrightarrow{\mu_{id_{Km} : Km \rightarrow Km} = \sigma_{Km}} & Tm \\
 \uparrow \sigma_c = \sigma_{Km} & & \uparrow \alpha_m \\
 SKm & \xrightarrow{Sf = Sid_{Km}} & SKm
 \end{array}$$

より言える.

[4] $\sigma : S \rightarrow R$ の唯一性.

[2] において $f : c \rightarrow Km, c' = Km, f' = id_{Km}$ とすると以下の図式を得る

$$\begin{array}{ccccc}
 & & \mu_{f : c \rightarrow Km} & & \\
 Rc & \xrightarrow{Rf} & RKm & \xrightarrow{\mu'_{id_{Km} : Km \rightarrow Km} = \epsilon_m} & Tm \\
 \uparrow \sigma_c & & \uparrow \sigma_{Km} & & \uparrow \alpha_m \\
 Sc & \xrightarrow{Sf} & SKm & \xrightarrow{SKm} & SKm \\
 & & Sf & &
 \end{array}$$

上の図式は全て可換で $\sigma_c : Sc \rightarrow Rc$ が唯一であることがわかる. (Rc が極限で $\mu_{f : c \rightarrow Km} \circ h_c = \mu_{f : c \rightarrow Km} \circ h'_c$ なら $h_c = h'_c$ となる/) \square

系 101. [マックレーン, 10.3 節] M が small, A が完備なら任意の $T : M \rightarrow A$ は任意の $K : M \rightarrow C$ に沿った右 Kan 拡張を持つ. さらに A^K は右随伴を持つ
特に M_{small} ならば任意の $T : M \rightarrow \mathbf{Set}$ は任意の $K : M \rightarrow C$ に沿った右 Kan 拡張を持つ.

Proof. 任意の $c \in \text{Ob}(C)$ について

$$T \circ Q : (c \downarrow K) \rightarrow M \rightarrow A$$

に関する極限 $\lim T \circ Q$ と $\mu : \Delta(\lim T \circ Q) \rightarrow TQ$ が存在することを示せば良い. これは M を経由しているため存在する. □

系 102. [マックレーン, 10.3 節] 100 のように $K : M \rightarrow C, T : M \rightarrow A$ を関手, 任意の $c \in \text{Ob}(C)$ について

$$T \circ Q : (c \downarrow K) \rightarrow M \rightarrow A$$

に関する極限 $\lim T \circ Q$ と $\mu : \Delta(\lim T \circ Q) \rightarrow TQ$ が存在すると仮定する.
さらに $K : M \rightarrow C$ が fully faithful の場合, K の T に沿った Kan 拡張 $R = \text{Ran}_K T$ についての普遍射 $\epsilon : RK \rightarrow T$ は自然同型を与える

Proof. $m \in \text{Ob}(M)$ について $\sigma_m : RKm \rightarrow Tm$ が A 上で自然な可逆を持つことを言えば良い.
 $\text{Ob}(Km \downarrow K)$ は K が fully faithful であるので次のようにかける.

- $(m', Kh) : \text{Ob}(c \downarrow K)$ は $m \in \text{Ob}(M)$ かつ $Kh : Km \rightarrow Km' (Km \rightarrow Km'$ は fully faithful よりこの形でかける)
- Morphism $H : (m_1, Kh_1) \rightarrow (m_2, Kh_2) \in \text{Hom}_M(m_1, m_2)$ を $H : m_1 \rightarrow m_2$ で $h_2 = H \circ h_1$ となるもの.

$$T \circ Q : (c \downarrow K) \rightarrow M \rightarrow A : (m', Kh) \rightarrow Tm'$$

である. 任意の $h : m \rightarrow m'$ について,

$$Th : Tm \rightarrow Tm'$$

が定めるので, $\alpha_m : Tm \rightarrow \lim TQ$ が唯一存在する. 一方で $\sigma_m : id_m : m \rightarrow m$ について $\lim TQ \rightarrow Tm$ が定まる. $\sigma_m \circ \alpha_m = id_m$ は唯一性のところから明らか. 逆については, 唯一性からである. □

系 103. M が C の full sub category つまり包含関手 $K : M \rightarrow C$ が fully faithful とする.
 $T : M \rightarrow A$ 関手とする. $c \in C$ について

$$(c \downarrow K) \rightarrow M \rightarrow A$$

が A 内に極限を持つとき $R : C \rightarrow A$ があって $\epsilon : RK \cong T$ である.

特に恒等自然変換 $1: RK \rightarrow T$ とすると $(R, 1)$ は T の K に沿った右 Kan 拡張となる.

定理 104. [マックレーン, 10.3 節] $K: M \rightarrow C, T: M \rightarrow A, G: A \rightarrow X$ とする. G が左随伴を持つ時, G は右 Kan 拡張を保存する.

$$G \circ \text{Ran}_K T = \text{Ran}_K GT$$

Proof.

$$\text{hom}_A(Fx, a) \cong \text{hom}_X(x, Ga)$$

により $H \in X^C, L \in A^C$ について

$$\text{Nat}(FH, L) \cong (HGL)$$

がいえる. よって任意の $H \in X^C$ について自然な全単射

$$\text{Nat}(H, G \circ \text{Ran}_K T) \cong \text{Nat}(FH, \text{Ran}_K T) \cong \text{Nat}(FHK, T) \cong \text{Nat}(HK, GT) \cong \text{Nat}(H, \text{Ran}_K GT)$$

が成り立つので, 同型と言える. □

References

- [alg] alg-d 全ての概念は Kan 拡張である https://alg-d.com/math/kan_extension/
- [Asg] Dagur Asgeirsson *The Foundations of Condensed Mathematics* <https://dagur.sites.ku.dk/files/2022/01/condensed-foundations.pdf>
- [Bar22] Michael Barz *Condensed Mathematics* <https://www.dropbox.com/scl/fi/xm2bs6jgtv9oaqir2slbt/condensed-final.pdf?rlkey=r1x82m3a135rfeec86jrjj79k&e=1&dl=0>
- [Fra] Martin Frankland *Math 527 - Homotopy Theory Additional notes* https://uregina.ca/~franklam/Math527/Math527_0204.pdf
- [Land] Marks Land *CONDENSED MATHEMATICS* <https://www.markus-land.de/teaching/>
- [Lep] Florian Leptien *Master thesis Condensed Mathematics*
- [Sta] Stacks Project *Site and sheaves* <https://stacks.math.columbia.edu/download/sites.pdf>
- [Stum] Bernard Le Stum *An introduction to condensed mathematics* https://perso.univ-rennes1.fr/bernard.le-stum/bernard.le-stum/Enseignement_files/CondensedBook.pdf

- [Str] N. P. Strickland *THE CATEGORY OF CGWH SPACES* <https://ncatlab.org/nlab/files/StricklandCGHWSpaces.pdf>
- [Sch19] Peter Scholze *Lectures on Condensed Mathematics* <https://www.math.uni-bonn.de/people/scholze/Condensed.pdf>
- [SchClau] Peter Scholze, Dustin Clausen *Masterclass in Condensed Mathematics* <https://www.math.ku.dk/english/calendar/events/condensed-mathematics/>
- [Sha1] Shane Kelly *Notes on the [HTT] proof of sheafification* <https://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~kelly/Course2023-24DAG/Sheafification.pdf>
- [Sha2] Shane Kelly *Fast track guide to cardinals for use with Lurie's Higher Topos Theory* <https://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~kelly/pdfs/cardinalsFastTrack.pdf>
- [Iwa22] 岩井雅崇 集合と位相まとめノート <https://x.gd/aDQt1>
- [田中] 田中尚夫 公理的集合論 培風館
- [マックレーン] S. マックレーン 圏論の基礎 丸善出版